

下呂ふるさと歴史記念館開館 40 周年記念事業シンポジウム

縄文・峰一合遺跡の時代の再検討



2012（平成 24）年 7 月 8 日（日）

主催：下呂市教育委員会・下呂ふるさと歴史記念館

例言

- 1、本書は下呂ふるさと歴史記念館開館 40 周年の記念事業として 7 月 8 日（日）に開催するシンポジウム「縄文・峰一合遺跡の時代の再検討」の発表要旨集である。
- 2、本書の編集は、下呂市教育委員会の馬場伸一郎が行った。
- 3、本書は、下呂市教育委員会社会教育課が発行する。

シンポジウム開催要領

開催趣旨

本シンポジウムは、縄文時代前期後半の集落遺跡として全国的に知られる峰一合遺跡について、同遺跡とその時代を再評価するため広い観点から検討すること目的としたシンポジウムです。1966 年から 1971 年の 5 ヶ年をかけて実施された峰一合遺跡からは 5 軒の堅穴住居跡が検出された他、大量の土器とともに数多くの下呂石製石器が出土しました。また、縄文人の食料と考えられる「パン状炭化物」が出土し、当時、全国的なニュースにもなりました。しかし、発掘調査後、長らく出土遺物が公にされることはありませんでしたが、吉田英敏氏のご尽力により、2003 年に発掘調査報告書を刊行することができました。それにより、峰一合遺跡の情報共有が格段に進展したことは見逃せません。

現在、飛騨の縄文前期後半の意義を考える上で峰一合遺跡は欠かせない存在になっておりますが、出土土器、石器、装飾品、炭化物のそれぞれについて歴史的位置づけと意義が検討されること多くの研究者・郷土史家・市民が望んでいるところでございます。今回のシンポジウムは、峰一合遺跡の歴史的位置づけの手がかりを各方面の検討から得るとともに、今後の諸課題を共有すること目的としています。

日 時：2012 年 7 月 8 日（日） 13:00～17:00

場 所：下呂交流会館 〒509-2202 下呂市森 2270-3

プログラム

13:00	シンポジウム開会・開催趣旨と問題提起	
13:10～13:30	縄文時代前期後半の飛騨を中心とした地域間交流	馬場伸一郎
13:30～14:00	飛騨の縄文前期後半土器と住居・集落	大石崇史
14:00～14:10	(休憩)	
14:10～14:40	近畿の縄文前期後半土器から見た中部の様相	鈴木康二
14:40～15:10	峰一合遺跡出土「パン状炭化物」と炭化した食物の分析例	中村賢太郎
15:10～15:30	(休憩)	
15:30～15:40	東海地方における峰一合遺跡	長田友也
15:40～16:50	討論「縄文・峰一合遺跡の時代の再検討」司会：長田友也	発表者全員
17:00	シンポジウム閉会	
17:00～19:00	下呂ふるさと歴史記念館企画展「縄文・峰一合遺跡の時代」(7/8 特別開館時間延長)	
17:30～18:00	企画展展示解説実施	

表 紙：峰一合遺跡出土パン状炭化物拡大写真（撮影：株式会社パレオ・ラボ）

目次

縄文時代前期後半の飛騨を中心とした地域間交流	馬場伸一郎	(2)
飛騨の縄文前期後半と集落	大石崇史	(13)
縄文時代前期後半の飛騨地方の地域性についての予察	鈴木康二	(20)
峰一合遺跡出土「パン状炭化物」と炭化した食物の分析例	中村賢太郎	(26)
東海地方における峰一合遺跡	長田友也	(33)
巻末資料集		(39)

縄文時代前期後半の飛騨を中心とした地域間交流

馬場伸一郎(下呂ふるさと歴史記念館)

1. 問題の所在

飛騨の縄文時代前期後半は、北白川下層 II 式分布圏に属するのか、あるいは諸磯式土器分布圏に属するのか、本稿執筆の発端はその疑問にある。

今回、下呂ふるさと歴史記念館開館 40 周年を記念した「縄文・峰一合遺跡の時代」を企画した際、飛騨を含む前期後半の土器に接する機会を得た。飛騨を代表的する前期後半遺跡には、高山市村山・中切上野・堂之上的各遺跡、下呂市峰一合遺跡、白川村島中通等があるが、いずれの出土土器も、網谷克彦(網谷 1982) や鈴木康二(鈴木 2008a) が整理した北白川下層 II 式の各型式、今村啓爾(今村 1982)・谷口康浩(谷口 1989)・閔根慎二(閔根 2008) の言う諸磯式の各型式、増子康眞が「小御所式」・「清水ノ上 III 式」・「大麦田 I 式」と呼ぶ型式(増子 1981・1996・1998) あるいはそれと類似するもので構成されていた。そして、飛騨の前期後半土器を理解するには、まず増子が設定した諸型式を手がかりとしながら、遺跡単位に土器を理解する手法が有効であると筆者は考えた。

これまでの発掘調査報告書では、「北白川下層 II 式か」あるいは「諸磯式か」といった二元論的理解を前提としたものが多いが、ここでは二元論的な見方を一旦解消し、当該地域の土器について遺跡ごとに土器の変化の方向性の基準になる単位資料を確認しながら、土器群の時間的序列と地域的なまとまりを考え、土器型式分布圏間の地域間交流を考えてみたい。

2. 飛騨における縄文前期後半土器の変化の方向性を理解する手がかり

(1) 前期後半の深鉢形土器と口縁部形態・装飾帯構成

飛騨の前期後半土器の検討の前に、本稿の主たる分析対象になる北白川下層 II 式の器形や装飾帯について、鳥浜貝塚例(網谷 1979)を基に整理してみたい。

北白川下層 IIa 式の段階に深鉢が平底へ変化し、また有文深鉢 2 種が成立し器形に差が認められることは網谷克彦(網谷 1982)が既に指摘している。そうした大きな変化とともに、口縁部形態のバラエティにも変化の方向性が窺え、北白川下層 IIa 式以降の深鉢に特に認められる腕形口縁の他、外反・胴部上半屈曲・直立・内湾(図 1)といった口縁部形態が認められる。なお、北白川下層 III 式以後については、滋賀県栗津貝塚湖底遺跡例(泉 1984)にて受口状口縁や胴部のくびれが強い器形の組成が明瞭であり、同 IIc 式以前の器形のあり方と画することが可能である。

一方、器形以外の「装飾帯」(注 1)のあり方にも注目したい。本稿では装飾が施される部位を「装飾帯」と呼び、そのあり方や変遷に着目した。羽島下層 II 式から北白川下層 Ib 式の間では、基本的に口唇部・口縁部・胴部下半の 3箇所に装飾帯があり、胴部上半は空白带になるパターンが圧倒的である。しかし、北白川下層 IIa 式には装飾帯構成に変化が起り、同 IIc 式の終わりまで口唇部([1a] 装飾帯)、口縁部最上部位([1] 装飾帯)、口縁部から胴部上半([2] 装飾帯)の 3つの装飾帯の成立とその存続が明瞭に認められる。[2] 装飾帯については、口縁部付近にて装飾帯が収まるパターンの他、口縁部から胴部上半にまで装飾帯が及ぶ幅広パターンがある。後者については[2 広] 装飾帯と記すことにする。なお、[1] 装飾帯につい

ては、北白川 IIa・IIb 式には無文の〔0〕であるのが一般的だが、凸帯の施文へと主流が移行する同 IIc 式でもより後半には、〔1〕装飾帯を伴う例が一定量を占めるようになる。

つまり、北白川下層 IIa 式・IIb 式・IIc 式が各々前後する型式と分離できる大きな要素として、碗形口縁の存在に象徴される器形のバラエティの共通性と、〔1a〕・〔1〕・〔2〕の装飾帯構成を基本とする文様割り付け方法の共通性の2点に整理できることは重要である。以下、爪形文等の文様モチーフの他に、口縁部形態と装飾帯構成にも注目しながら、まず飛騨の出土土器を点検してみよう。

(2) 高山市中切上野遺跡出土の前期後半土器

高山市中切上野遺跡は、前期後半から末にかけての堅穴住居跡を 15 軒検出しており(田中編 1999)、当該時期の飛騨の様相を理解するにあたり、手がかりになる情報を提供してくれる。第 10 号住居跡の覆土には、羽島下層 II 式から北白川下層 Ib 式に該当する北白川下層 II 式以前の土器群がわずかながら出土した。一方で、同じ覆土中には C 字形 II 型連續爪形文(網谷 1982)のある北白川下層 IIb 式類似の土器や、赤彩浅鉢も含まれる(図2)。そして、深鉢の口縁部に斜線・C 字爪形の刻目凸帯を有する土器もあり、覆土中の土器は複数時期にまたがっている。量的には北白川下層 IIb 式類似土器が目立ち、一方で凸帯を有する土器は少数派で、口縁部は直立・外反・内湾口縁がある。共伴する諸磯式系土器は、諸磯 a 式古段階から新段階である。

また、第 13 号住居跡(図3)では、深鉢の口縁部に2条ないしは3条程度の凸帯があり、凸帯上に明確に斜線刻目を施す土器が42 点の凸帯を有する土器中、実に25点と約6割認められ、構成の度合の高さを窺わせる。その深鉢の口縁部は、直立・内湾口縁が主流であり、外反口縁はわずかで、「くの字」に屈曲するものは認められない。また、13 号住居跡出土土器には、対向する弧線や直線の凸帯により〔1〕装飾帯を形成する例が認められ、注目される。〔2 広〕装飾帯をもつ深鉢の存在はわずかである。なお、同住居跡覆土には、若干北白川下層 IIa 式以前の土器を含むものの、諸磯 b 式古段階の土器片や、同遺跡を代表する木の葉文浅鉢形土器として著名な諸磯 b 式中段階の浅鉢(図3-13)が明瞭であり、10 号住居跡より、一段階新しい土器群であることを推測される。

次に、3 号住居跡覆土出土土器(図3)には、10 号・13 号住居跡と大きく異なる点がある。目立つのは、深鉢の口縁部に2条から3条程度の凸帯を貼り付け、その上に繩文を施文する例(凸帯上繩文施文深鉢)である。凸帯を有する土器片 56 点のうち、繩文施文例は 36 点と 6 割を超え、逆に斜線刻目施文例は 9 点、同押捺例・爪形刻目例は各 1 点に留まる。口縁部に凸帯を有する深鉢は、先の第 10 号住居跡と同様、直立口縁あるいは内湾口縁に見られるが、これまでにない傾向に「くの字」形口縁が一定量加わる点を指摘することができる。また、繩文施文凸帯を用いた〔1〕装飾帯の形成も前段階に引き続き認められる一方で、〔2 広〕装飾帯は見られない。

このように、13 号住居跡にて確認できた凸帯上斜線刻目施文優位から、3 号住居跡にて認められた凸帯上繩文施文優位への変化とともに、〔1〕装飾帯を有する深鉢の一定量の組成と〔1〕・〔2〕装飾帯への施文の集約化が確認できる。一方で、〔2 広〕装飾帯の消滅傾向が確認できた。その変化を裏付けるように、第 3 号住居跡では、大多数は諸磯 b 式新段階と同 c 式古段階に該当する深鉢と特殊浅鉢が出土し、第 10 号住居跡出土の諸磯式土器より一段階新しい。共伴する諸磯式土器の時間的変遷に矛盾はない。

中切上野遺跡の前期後半土器の点検の結果、時間的に前後する土器を若干含みつつも、「第 10 号住居跡→第 13 号住居跡→第 3 号住居跡」と、住居跡覆土から出土した土器群を単位に、諸磯式や北白川下層 II 式の

共伴関係とも矛盾のない変化の方向性を確認することができた。本稿では、その変化の方向性を仮に「中切上野 I 期（第 10 号住居跡覆土出土土器）→中切上野 II 期（第 13 号住居跡覆土出土土器）→中切上野 III 期（第 3 号住居跡出土土器）」とし、以下、比較検討の手がかりにする。

（3）飛騨一帯の縄文前期後半土器

さて、中切上野遺跡で確認できた変化の方向性がどの範囲まで確認できるのか事例を点検してみよう。

①白川村島中通遺跡

白川村島中通遺跡では、検出した 2 軒の竪穴住居跡から前期後半土器が出土した（図 2）。出土土器の時期的傾向については小杉康の論考に詳しい（小杉 1995）。出土した壺入・模倣の諸磽式土器は諸磽 a 式から b 式古段階に限られる。深鉢の口縁部は、碗形口縁が他を圧倒し、直立・外反口縁が次いで存在する。文様モチーフでは、C 字形 II 型爪形文と、凸带上縦位刻目施文及び同 C 字刻目施文が特徴的な凸带上刻目施文深鉢が豊富であり、また〔2 広〕装飾帶のある深鉢が多数存在する。

注目したいのは、島中通出土例には凸带上縦位刻目施文土器に〔1〕装飾帶を有する例がない点である。この点は、凸带上刻目施文土器が卓越する中切上野遺跡 13 号住居跡例や後に触れる御望遺跡 SB01 例に認められない要素であり、時間差を示す尺度となろう。

さて、網谷は、島中通遺跡の同一遺構から出土したこれまでの北白川下層 IIb 式・IIc 式をもって「北白川下層 IIb 式新段階」を設定した（網谷 1999）。しかし、型式の混乱を招くと批判した小杉は、それに対し北白川下層 IIc 古段階の別称を提唱し、従来の北白川下層 IIc 式を IIc 新段階とした（小杉 1999）。また、北白川下層 IIb 式新段階は平均幅 4.4mm の「第 2 種爪形文」の成立をもって区分するという。本稿では、小杉の認識に従い、北白川下層 IIb・IIc 諸型式名を使用するものとするが、出土した諸磽式の時期を手がかりとすれば、島中通例は北白川下層 IIc 式古段階の典型例として認識ができ、一つの時期単位とできる。

②高山市国府町村山遺跡

島中通遺跡と類似する土器群は、高山市村山遺跡（図 2）にて認められる。1 軒の竪穴住居跡から前期後半にはほぼ限られる土器群を検出した。覆土層位については不明だが、当資料は当該時期の中でも時間がほぼ限定できる単位資料として貴重である。出土土器の中でも、特に目立つのは、報告書で第 9 類とされた諸磽 a 式新段階の深鉢、第 10 類とされた同 b 式古段階の深鉢の他、第 2 類の中に含まれる連続爪形文の深鉢、C 字形 II 型爪形文の深鉢、凸带上縦位刻目施文・同 C 字爪形施文深鉢である。特に、凸带上刻目施文深鉢には島中通遺跡例と同じく〔1〕装飾帶の存在が確認できない点、〔2 広〕装飾帶を伴う構成が主体である点が注目できる。なお諸磽 b 式古段階の土器の出土は同 a 式に比べ若干少ない。

中切上野 10 号住居跡では数量的な問題からその段階の内容が乏しかったが、以上の島中通・村山の各遺跡例はそれと共にする内容の土器群で構成され、内容も具体的である。島中通・村山の各遺跡出土土器が中切上野 13 号住居跡出土土器に先行することは文様モチーフや装飾帶構成の違いから明らかである。そのため、「島中通・村山段階」と位置づけ、変化の方向性を再度点検してみよう。

③飛騨を中心とした変化の方向性

島中通・村山段階では、北白川下層 IIb 式でもより新相と同 IIc 式古段階の深鉢が主体を占める。同型式の深鉢の口縁部は碗形口縁が他を圧倒し、直立口縁や外反口縁は少數派である。なお、内湾口縁・「くの字」形口縁は認められない。碗形口縁部をもつ深鉢には、口唇部に小突起が一定の間隔に認められ、その他の深鉢は口唇部に爪形文施文工具による刻目が施される。また深鉢の装飾帶は、口縁部から胴部にかけて幅広い

装飾帯をもつ〔2広〕が一般的であり、一方で〔1〕装飾帯の存在は認められない。文様モチーフは、C字形II型爪形文を中心に、凸帶上縦位刻目・同C字爪形施文が加わる。

次の中切上野II期の段階では、装飾帯では〔2広〕が激減し、口縁部形態では碗形・直立口縁に加え、内湾口縁が一定量組成する変化が発生する。そして、口縁部の内側傾斜傾向に合わせ、傾斜に適合するより幅の狭い〔2〕装飾帯が主流になる。さらに口縁部最上段に、凸帶貼付による縦位文様や「ハの字」文様が施文された〔1〕装飾帯が成立し、一定量その深鉢が組成する。そして、凸帶上斜線刻目施文例が半数以上を占める。下呂市市場遺跡5号住居跡出土土器（大江1993）の多くも本段階に該当する。

中切上野II期に後続するIII期では、引き続き幅の狭い〔1〕・〔2〕装飾帯への施文の集約が認められる。一方で、深鉢の「くの字」口縁が本段階から明確になり、碗形口縁と共に中心を占める。また、凸帶上に縄文を施文する凸帶上縄文施文深鉢が多数存在する。

このように、飛騨を中心とした一帯では、深鉢主要文様の「C字形II型爪形文・凸帶上刻目施文→凸帶上斜線刻目施文→凸帶上縄文施文」という変化が確認でき、深鉢の装飾帯と口縁部形態の変化も、文様の変化の方向と矛盾ない。特に、凸帶上縄文施文が文様モチーフの中心になる段階では、内湾口縁と「くの字」形口縁が多数派であり、また装飾帯幅の狭い〔1〕・〔2〕装飾帯をもつ深鉢が占める。

では、そうした飛騨を中心とする前期後半土器の変化の方向性はどこまで広がりをもつてであろうか。前期後半土器が比較的豊富に出土した岐阜市の御望遺跡を点検してみよう。

3、岐阜市御望遺跡出土の前期後半土器

御望遺跡の報告によれば、前期後半から前期末の土器はI期・II期・III期の3段階に分かれ、I期は北白川下層II式が主体、III期は北白川下層III式及び大歳山式が主体であり、I期とIII期は、中部高地・関東系土器は少数派である（内堀1995）。御望遺跡も先の中切上野遺跡と同様に住居跡覆土の土器を検討の主たる単位とせざるを得ないが、変化の方向性は確認することができる。

御望遺跡A区SB01（図4）では、C字形II型爪形文により特徴付けられる北白川下層IIb式系深鉢及びそれに類似する深鉢と浅鉢、諸磯b式新段階及びその直後の浅鉢が一定量加わる。しかし、主体はそれらの土器ではなく、口縁部に数条の凸帶を有する深鉢である。その凸帶上に斜線や「ハの字」（=増子の「露齒」）の刻目を施す手法が特徴的である。図化資料を見る限り、斜線に比べ「ハの字」の刻目が若干数量的に多い。口縁部は碗形口縁と外反口縁が多く見られる。またSB04b出土土器についても、点数はわずかだがSB01と同様の土器群で構成される。

次に、内堀がII期に位置づけたSB08bとSB09下層土器（図4）では、深鉢口縁部に、縄文施文の数条の凸帶を有する深鉢が主体を占め、凸帶上刻目施文は少数派へと転じていることが明瞭である。SB10も同様の傾向である。直立口縁と外反口縁が主体でありながらも、「くの字」形口縁例が以前に増して目立つ。また、同住居跡からは、諸磯c式に比定できる厚手の特殊浅鉢が一定量加わり、更に諸磯c式系深鉢が出土した。

このように、御望遺跡でI期・II期とされた土器群を点検した結果、I期と位置づけられたSB01では、深鉢の口縁部に斜線・「ハの字」が施された凸帶をもつ土器を中心に、北白川下層IIb式系の深鉢と、諸磯系の厚手の浅鉢が一定量加わる構成が看取できた。そしてII期とされたSB08b及びSB09下層出土土器では、深鉢の口縁部に数条の凸帶を有し、その凸帶上への縄文施文が明瞭である。また、諸磯c式系の厚手の浅鉢が一定量認められる。

御望遺跡と中切上野遺跡等飛騨一帯の例を比較すると、諸磯系浅鉢形土器が加わる器種構成、凸帯上の施文の変化、幅の狭い〔1〕・〔2〕装飾帶への文様の集約化、そして中心になる口縁部形態の変化の方向性について共通し、差はほとんどない。凸帯上の刻目施文で、斜線ではなく「ハの字」がやや多い傾向は留意すべき点であるが、斜線と「ハの字」が同一土器にて複合する例もあるため、時間差に置き換えることにはやや躊躇する。そうした、御望遺跡で見られた飛騨一帯と比較した場合の共通点・相違点は、どの程度の範囲まで確認できるのであろうか。

4、飛騨一帯の縄文前期後半土器とその他遺跡の対比

(1) 岐阜・愛知・三重方面との比較

さて、中切上野等の飛騨の遺跡や御望遺跡と対比できる前期後半土器に、恵那市上矢作町の小御所遺跡、中津川市落合五郎遺跡、関市松原遺跡、豊橋市の大麦田遺跡、揖斐川町藤橋の小の原遺跡などがある。

小御所遺跡は、凸帯上に斜線刻目を施す凸帯刻深鉢と、C字形 II 型爪形文を用いた深鉢が明瞭である。SB4 と SB5 からその良好な土器が出土し、増子は本例で「小御所式」を設定した（増子 1998）。特に SB5 からは凸帯斜線刻目の深鉢とともに、深鉢の口縁部形態・装飾帶構成・凸帯上の施文に中切上野 II 期との共通性が窺え、諸磯 b 式古段階の深鉢、木の葉文赤彩浅鉢が組成し、編年上有効な情報が多い。

また、阿曾田遺跡（渡辺編 1985）は、2・21・53 号住居跡出土土器が中切上野 III 期併行であり、深鉢の口縁部形に、内湾口縁・「くの字」形口縁が組成する。

その他、落合五郎遺跡（渡辺編 1988）は、北白川下層 II 式以前の土器群の出土も明瞭で、島中通・村山段階以後中切上野 III 期までの間、器種構成・装飾帶構成・文様とも飛騨一帯のあり方と共通する。碗形・内湾口縁には凸帯上刻目施文、内湾・「くの字」形口縁には凸帯上縄文施文が結びつく、飛騨一帯と共に傾向が認められる。

なお、出土点数が少ない例だが、関市松原遺跡（吉田 1994）では、2 号住居から中切上野 III 期併行の土器が出土し、凸帯上縄文施文と直立口縁が目立つが「くの字」形口縁も組成する。また、愛知県旭の大麦田遺跡（吉田ほか 1968）は、中切上野 III 期併行の土器が出土し、深鉢の凸帯上に縄文を施文する手法が明瞭で、「くの字」形口縁が口縁部形に加わる。大麦田遺跡で出土した諸磯系土器は、同 b 式新段階から同 c 式古段階である。また、中切上野 III 期併行の土器が出土した恵那市花無山遺跡（西部 1982）でも、外反・直立口縁が多数の中で、少数ながら「くの字」形口縁が認められる。

では、岐阜県西部ではどうか。揖斐川町藤橋の小の原遺跡（宇治ほか 1991）では、中切上野 II 期・III 期併行の土器群を主体とする。そこでは、凸帯上刻目施文と凸帯上縄文施文の深鉢が多数出土し、また幅の狭い〔1〕・〔2〕装飾帶に文様が集約される傾向が特徴的である凸帯上刻目施文の深鉢では、碗形・外反・内湾口縁であることが多く、凸帯上縄文施文の深鉢では、内湾・「くの字」形口縁が目立つ。

次に、伊勢湾沿岸部に位置する三重県松坂市山添遺跡では、SH102 が中切上野 II 期併行の土器を主体とし、SH101 が中切上野 III 期併行の土器を主体とする。SH102 における凸帯上刻目施文深鉢の口縁部は碗形・外反・直立口縁であり、SH101 における凸帯上縄文施文深鉢の口縁部は SH102 と同様に、碗形・外反・直立口縁が中心で、内湾・「くの字」形とも數点に限られる。凸帯上刻目施文深鉢や C 字形 II 型爪形文土器が認められる SH102 では、凸帯をモチーフとした〔1〕+〔2 広〕装飾帶構成の存在が確認できるが、SH101 では口唇部最上端に凸帯のない〔0〕+〔2〕装飾帶構成が目立つ。これまで検討した遺跡例と変化の方向性は同じである。

なお、「下層包含層」出土の資料に、口縁部が内湾・「くの字」形で、そこに細い凸帯を多条に貼り付けし、凸帯上には刻目施文する深鉢が目立つ。増子が「大麦田 IIIa 式」の基準とした芦戸 SX02 出土土器に類似する土器群である。それは、岐阜北西部の徳山ダム一帯で多数出土する北白川下層 III 式の器形・装飾帶とは差異が大きく、「北白川下層 III 式」分布圏とは別に「芦戸式」分布圏の存在が推定される。

このように、凸帯上の施文変化、深鉢口縁部形の変化と幅の狭い [1]・[2] 装飾帶への施文の集約化が確認できる。そのため、飛驒一帯の前期後半土器に見られた変化の方向性は、御望遺跡に留まらず、中京圏一帯にも認められる傾向として理解して間違はないであろう。

(2) 滋賀・福井方面

本項については、本稿の始めに鳥浜貝塚例を検討しており、また本要旨集の鈴木康二から詳細な検討があるため、簡単に触れるに留める。鳥浜貝塚（網谷 1979）第9群土器の凸帯上縄文施文土器には「くの字」形口縁は認められず、同様に、栗津貝塚湖底遺跡（泉 1984）、下鶴遺跡（近藤 1993）、上出遺跡 SH5（鈴木 1999）でも同様に「くの字」形口縁は認められないか、あるいは鮮明ではない。碗形・直立・外反・内湾口縁に集約されるのが特徴である。

5、飛驒を中心に形成される縄文前期後半の「地域」と地域間交流

縄文前期後半の北白川下層 II 式併行期の土器を対象に、飛驒・岐阜・愛知・三重方面の遺跡とその内容を比較した結果、深鉢口縁部の形態とその変化、装飾帶構成の特徴とその変化、深鉢の口縁部に施文される凸帯上の施文の変化にて共通する傾向が確認でき、またそうした土器の変化の方向性を基準とした段階区分についても、各要素の画期から区分が可能である。

また、それら飛驒を含む中京圏一帯と滋賀・福井方面の相違点として、主体となる口縁部形態の違いを指摘した。ただし、大きな相違は口縁部形態にほぼ限られており、器種構成・装飾帶形成・主要になる文様モチーフとその変化の方向性は共通する点は重要である。

このように、飛驒を含む中京圏は北白川下層 II 式の分布範囲として理解できる「地域」であり、滋賀・福井方面との深鉢口縁部形態の差異は、諸磯式土器分布圏の交流の頻度により発生した同一土器型式分布圏の地域性として理解できるものである。

さて、「くの字」形口縁部の多少が発生する背景には、諸磯式土器分布圏との交流の頻度を示すものとして考えられなくもない。既に芦戸遺跡を報告した高木宏和が諸磯 b 式の影響と推定し（高木 1988）、また水汲遺跡の報告の中で鈴木康二是「くの字」形口縁部を有する深鉢の器形について諸磯 b 式の有稜浅鉢の影響を指摘した（鈴木 2011）。とすれば、中切上野遺跡等の飛驒一帯で認められた内湾口縁あるいは「くの字」形口縁の一定の存在を手がかりに、諸磯式系のいわゆる「特殊浅鉢形土器」が飛驒に流入するルートや、それを介した諸磯式土器分布圏との交流の頻度を推し量ることができるのではないだろうか。それを示唆するかのように、長野県王滝村崩越遺跡（神村 1982）は諸磯式の比率が高い遺跡であるが、同 8 号住居跡出土土器（図 5）では中切上野 III 期に属する凸帯上縄文施文の深鉢が良好な状態で出土しており、そこでは「くの字」形・内湾口縁が数多く認められる。また、中切上野 II 期から III 期の土器が多数出土した峰一合遺跡（吉田 2003）でも、凸帯上刻目施文や同縄文施文の深鉢では、口縁部形態が「くの字」形と内湾形が目立つ。このように岐阜県側でも、長野県側と接する飛驒から中津川市界隈の「東濃」と呼ばれる地帯にて、諸磯式の影響を受け成立したと考えられる内湾形・「くの字」形がよく認められる。それは、飛驒・東濃の複数の峰を

介して行われた諸磯式土器分布圏との交流頻度に比例したものであろう。

また、[1] 装飾帯の成立は、土器型式分布圏間の交流により発生した可能性がある。[1] 装飾帯の成立は、同帶を無文帶とする北白川下層 IIb 式の深鉢に系譜は追えず、また成立期に併行する諸磯式 b 式中段階があるいはそれ以前の深鉢にも追えない。可能性があるは諸磯式の「有稜浅鉢」の棒状の縦位凸帶（浮文）であり、「くの字」口縁とともに北白川下層 II 式へ影響を及ぼした可能性も考慮する必要があろう。

そうした前期後半の土器に見られる地域間交流は黒曜石石材の北白川下層 II 式分布圏への流入からも窺い知ることができる。岐阜県内における黒曜石石材の原産地推定分析例はまだ数少ないが、例えば時期をほぼ前期後半から前中期に限定できる峰一合遺跡出土黒曜石石材では、9 点中 6 点は信州産西霧ヶ峰系ないしは和田峠・鷹山系と判別された（杉原 2011）。一方で、岐阜県東部と接する長野県木曾一帯のうち、前期後半の崩越遺跡等で下呂石製石器の出土が一定量認められ（岩田 1998）、土器以外に石材からも「鞍掛峠」を経由したと思われる双方向的な交流の存在を窺うことができる。

最後にだが、先の「くの字」形口縁深鉢が目立つ地域のうち、特に飛騨・東濃・木曾一帯は下呂石製石器が一定量組成する地域でもあり（岩田 1998・田部 2003）、「下呂石の流通」と土器相に接点が窺える。そのため、湯ヶ峰産下呂石の原産地直下にある調文前期後半・峰一合遺跡の成立は、下呂石石材の流通の起点としてそれ相応の役割を持っていたと推定できる。その手がかりになるものとして、最近、大石崇史が調文早期中葉から前期初頭の丹生川村西田遺跡では下呂石の比率が 5 割以下であったのが、前期後半の高山市棟塚遺跡・中切上野遺跡では 7 割近くまで上昇することを指摘したことが注目される（大石 2012）。限られた石材比率の上昇は、原産地側で例えば石材搬出拠点集落の出現等の何らかの変化が発生していることを予測させるからである。しかし、湯ヶ峰における石材産出状況の把握、湯ヶ峰周囲の遺跡分布とその動態、消費地遺跡での石材の消費のあり方等々の具体化なくしては下呂石の採取から消費に至る過程も不透明なままであり、ましてや黒曜石等の他石材研究との比較検討も叶わない。過去に発掘し出土した遺物を現在の眼から再吟味すること、そして市域を越えた広域を見据えた研究が目下の急務であろう。

末筆ではあるが、本稿の執筆に際し、多くの方及び機関からご教示・ご協力を頂いた。記して感謝申し上げる。

（注）

注1 本稿で使う「装飾帯」は、山内清男（山内清男 1964）の「文様帯」とは厳密に異なる。また、山内は無文帯を文様帯には組み込まない。本稿の「装飾帯」が山内の「文様帯」との違う点からも、ローマ数字ではなくアラビア数字を用いる。

（引用・参考文献）

- 網谷克彦 1979 「第1節土器、2、土器 I」『鳥浜貝塚—調文前期を主とする低湿地の遺跡の調査 I』、19-58 頁、福井県教育委員会。
- 網谷克彦 1982 「北白川下層式土器」『調文文化の研究』第3巻、調文土器 I、201-210 頁、雄山閣。
- 網谷克彦 1989 「北白川下層式土器様式」『調文土器大観 I 章創期・前期・中期』、322-325 頁。
- 網谷克彦 1999 「北白川下層 IIb 式の細分と IIc 式」『前中期後半の再検討—記録集一』、第12回調文セミナー、71 頁～84 頁、調文セミナーの会。
- 泉拓良 1984 「第4章第2節遺物」『栗津貝塚湖底遺跡』、滋賀県教育委員会。
- 今井啓爾 1982 「諸磯式土器」『調文文化の研究』第3巻、調文土器 I、211-223 頁、雄山閣。
- 岩田修 1998 「石器としての下呂石の分布—岩石と考古学の接点—」『岐阜県地理教育』第35号、7-18 頁。
- 内畠信雄 1995 「御望遺跡」、岐阜市教育委員会。
- 宇野治幸他 1991 「小の原・戸入陣子暮遺跡」、岐阜県教育委員会。

- 大石崇史 2012 「石器に見る飛驒の縄文前期後半の様相」『高山歴史研究会発表資料』、高山歴史研究会。
- 大江まさる 1983 『島中通遺跡発掘調査報告書』、白川村教育委員会。
- 大江まさる 1993 『的場遺跡』、岐阜県恵那町教育委員会。
- 小野木学・近藤大典 2000 『上原遺跡 II』、岐阜県文化財保護センター。
- 春日井恒 2003 『尾元遺跡』、岐阜県文化財保護センター。
- 神村透編 1982 『崩越』、長野県王滝村教育委員会。
- 金井正三 1979 「縄文前期の特殊浅鉢形土器について」『信濃』第 32 卷第 4 号、333-348 頁。
- 小杉康 1995 「文化制度としての模倣製作—課題としての飛驒：岐阜県白川村島中通遺跡から」『飛驒と考古学』、35-76 頁、飛驒考古学会。
- 長田友也編 2011 『水汲遺跡第 2・3・5・6 次調査』、豊田市教育委員会。
- 神村透 1982 『崩越』、長野県木曾郡王滝村教育委員会。
- 小杉康 1999 「飛驒地方の前期後半の土器」『前期後半の再検討—記録集一』、第 12 回縄文セミナー、85 頁～90 頁、縄文セミナーの会。
- 近藤広 1993 『第 1 章下呂遺跡』『栗町町埋蔵文化財調査 1991 年度年報 II』、栗町町文化体育振興事業団。
- 松原重夫編 2011 『蛍光 X 線分析装置による黒曜石製造物の原産地推定—基礎データ集 2-1』、明治大学古文化財研究所。
- 鈴木康二 1999 『上出 A 遺跡』、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会。
- 鈴木康二 2008a 「北白川下層式土器」『絶賛縄文土器』、312-319 頁、アムプロモーション。
- 鈴木康二 2008b 「特殊凸部文系土器(北白川 III 式・大歳山式土器)」『絶賛縄文土器』、320-327 頁、アムプロモーション。
- 鈴木康二 2011 「水汲遺跡出土の縄文前期土器—器形を考える—」『水汲遺跡第 2・3・5・6 次調査』、223-232 頁、豊田市教育委員会。
- 間根慎二 2008 「諸磯式土器」『絶賛縄文土器』、282-289 頁、アムプロモーション。
- 高木宏和・松本建連 1988 『芦戸遺跡』、坂祝町教育委員会。
- 田中彰編 1999 『中切上野遺跡発掘調査報告書』、高山市教育委員会。
- 谷口康浩 1989 「諸磯式土器類」『縄文土器大観 I 草創期・前期・中期』、326-330 頁、小学館。
- 田部剛士 2003 「縄文時代前期・中期の石材利用」『縄文時代の石器 II』、第 5 回関西縄文文化研究会、101-106 頁。
- 西部良治 1982 『阿木川ダム関係遺跡発掘調査報告書 花無山遺跡他』、恵那市教育委員会。
- 増子康眞 1981 「第 3 章 東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階』本文編・補足改訂版、42-97 頁。
- 増子康眞 1985 「北白川下層 IIa・III 式併行の東海地方西部の土器」『古代人』第 45 号、1-11 頁、名古屋考古学会。
- 増子康眞 1992 「東海西部の縄文前期後半(伊奈縄文土器)の研究」『古代人』第 53 号、22-30 頁、名古屋考古学会。
- 増子康眞 1996 「縄文前期後半・大歳山式土器の再検討—岐阜県御器所・市場遺跡の再検討—」『古代人』第 57 号、1-22 頁、名古屋考古学会。
- 増子康眞 1998 「第 4 部小御所遺跡」『上村川下流域の考古学的調査』、73-148 頁、上矢作町教育委員会他。
- 百瀬忠幸・贋田明 2001 『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書 万場遺跡』、長野県大桑村教育委員会。
- 吉田英敏 1994 『松原遺跡』、開市教育委員会。
- 吉田英敏 2003 『峰一合遺跡』、岐阜県益田郡下呂町教育委員会。
- 吉田富夫・紅村弘・松井孟 1968 「万場垣内遺跡」『矢作ダム水没地域埋蔵文化財調査報告書』、愛知県教育委員会。
- 山下勝年 1997 「清水ノ上貝塚第 2 次調査出土の土器」『伊勢湾考古』第 11 号、1-38 頁。
- 山内清男 1964 「文様帶系統論」『日本原始美術』1、157-158 頁。
- 渡辺誠編 1985 『阿曾田遺跡発掘調査報告書』、中津川市教育委員会。
- 渡辺誠編 1988 『落合五郎遺跡発掘調査報告書』、中津川市教育委員会。

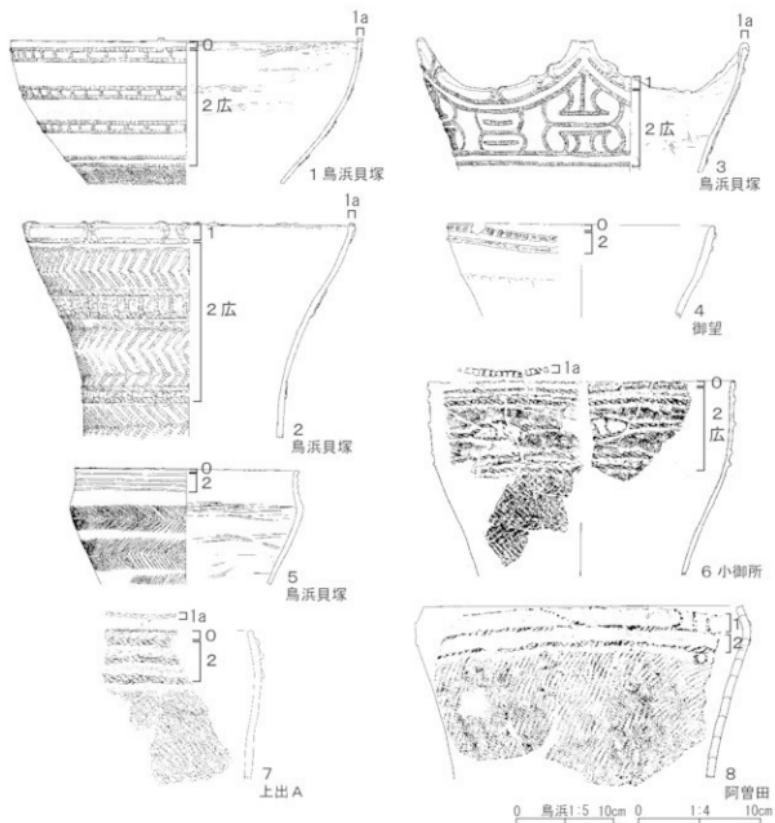


図1 繩文前期後半深鉢形土器の代表例と口縁部形態・装飾帯構成

1・2：碗形口縁 3・4：外反口縁 5：脇部上半屈曲口縁
6：直立口縁 7：内湾口縁 8：「くの字」形口縁

表1 飛驒を中心とした縩文前期後半の土器編年対応表

近畿	西美濃・岐阜	飛驒	東美濃	関東
北白川下層IIb 北白川下層IIc(古)		[村山・島中通]	鉢ノ木IIb	諸磯a式新
北白川下層IIc(新)	[御望SB01] [御望SB08b・09下層]	[中切上野13住] [中切上野3住]	小御所 清水ノ上III 大麦田I 大麦田II	諸磯b式古 諸磯b式中 諸磯b式新 諸磯c式古
北白川下層III	[尾元SK148・上原P01] [芦戸SX02]			

※ [] は段階を示す

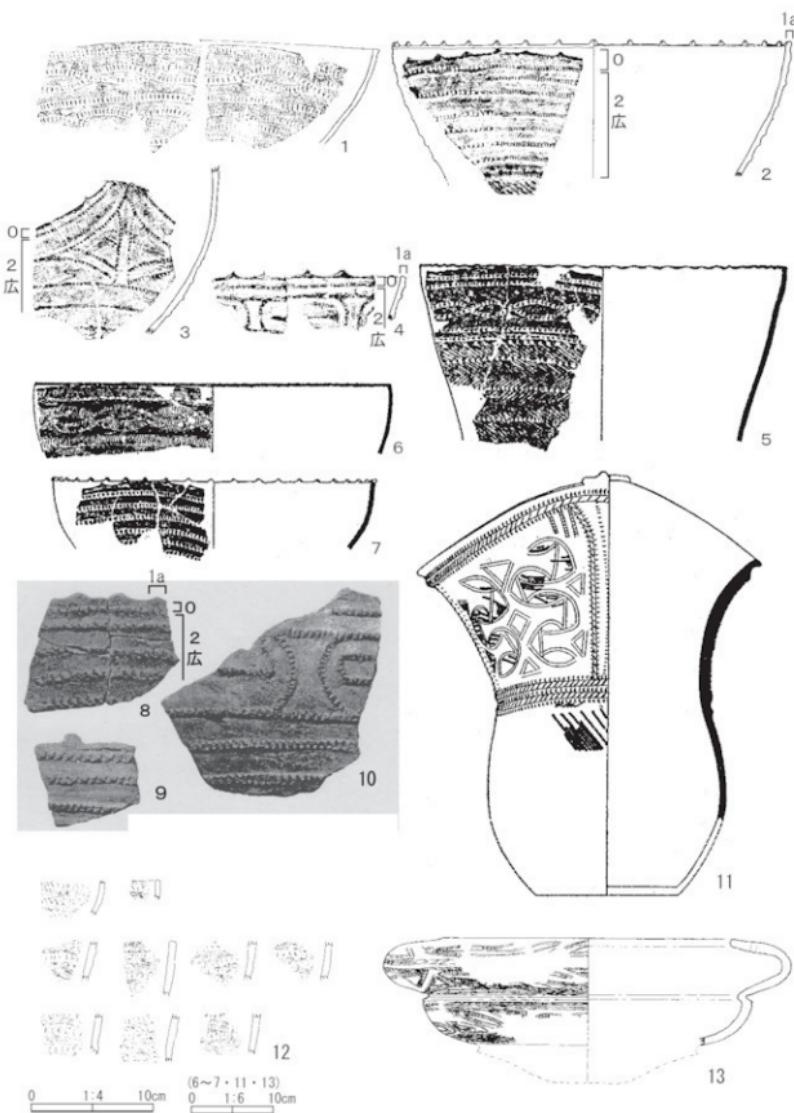


図2 飛驒の縄文前期後半土器 その1 村山・島中通段階(13は除く)
1~4:島中通、5~11:村山、12:中切上野10住、13:中切上野13住

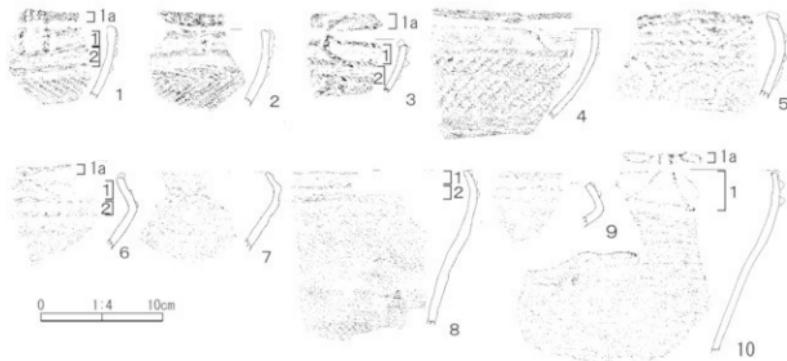


図3 飛驒の縄文前期後半土器 その2 中切上野13住段階・同3住段階
1～5：中切上野13住、6～10：中切上野3住

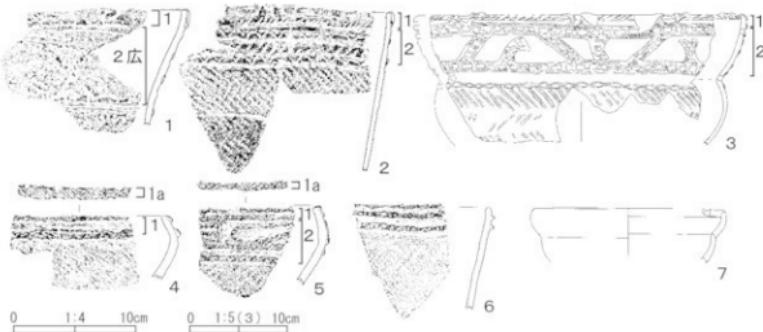


図4 御望遺跡出土の前期後半土器
1～3：SB01、4～7：SB08b・SB09下層

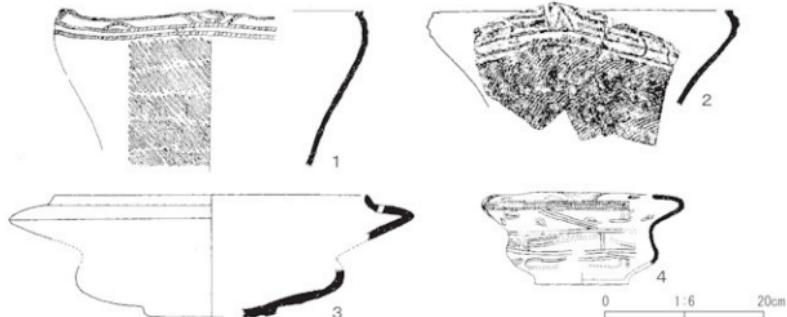


図5 崩越遺跡8号住居跡出土の前期後半土器

飛驒の縄文前期後半土器と住居・集落

大石崇史（飛驒高山まちの博物館）

はじめに

飛驒地方の縄文時代研究史において、縄文時代前期の遺構・遺物の調査研究は大きな位置を占めてきた。昭和初期の江馬修による「糠塚式」土器の研究、戦後の村山遺跡（高山市国府町）における県下初の堅穴住居跡の発掘、昭和40年代の峰一合遺跡（下呂市）における集落の発掘と「パン状炭化物」の出土、昭和50年代の糠塚遺跡（高山市）における浅鉢形土器の出土と国重要文化財指定など、これらの成果は現在も重要な意味をもつ。

本稿では、峰一合遺跡が最も栄えた前期後半について、飛驒における土器の様相を紹介し、あわせてこの時期の集落の様子について瞥見する。

1. 土器の様相

飛驒において、前期後半の遺物を多く出土した遺跡には、峰一合遺跡（下呂市）、的場遺跡（下呂市萩原町）、糠塚遺跡、向畠遺跡、中切上野遺跡（いずれも高山市）、村山遺跡、宮ノ下遺跡（ともに高山市国府町）、宮ノ前遺跡（飛驒市宮川町）、島中通遺跡（白川村）などがある。

飛驒の当該期の土器については、從来、関東系と関西系の土器に注目し検討されてきた。これは、古くは昭和初期の江馬修による糠塚遺跡の研究の初期の段階で、山内清男の指摘を受け「飛驒に於ける糠塚及びその系統に属する土器は、一面に於いて關東諸磯式的であるが、それにも増して河内國府式に近似してをり、同時にそれ自身かなりな程度に地方的な特殊性をもったもの、つまり糠塚式土器とも稱すべき一形式を構成するものであるといふ見解に達した」（赤木1935）とあるに始まる。その後、大野政雄らは村山遺跡の報告書で、関西系土器をA群、関東系土器をB群として分類し、両者の比率が8:2であることを明らかにしたが、大野は「A群とも異なり、B群とも著しく異なつた、この地方獨得の型式と思われるもの」があることを指摘し、「これらはC群あるいは中間土器、または村山式として一括すべきものであろうが、限界の設定が困難であり、いまは便宜より近いと判断される群に含めて」報告している（塩屋他1960）。近年では、田中彰が中切上野遺跡の報告の中で、「傾向としては、諸磯系のものの方が多いと思われる」ことを指摘し、「関東系、関西系、どちらにも属さない中部地方独自の隆帶施文土器も特筆され、それは非常に特筆されるべき土器形態であり、その量は非常に多いし、今後の大きな課題でもある」としている（田中1999）。

本稿では田中らの指摘を踏まえて、中部地方に多く見られる口縁部に凸帯を貼付する土器に注意し、特に飛驒中央部の遺跡出土の資料から内容にまとまりの見られるものをもとに、飛驒地方の概期の土器様相を見ていきたい。

〈村山遺跡〉（図1）

当遺跡では堅穴住居跡から爪形文を施す資料が多く出土している。器形は頭部から口縁部に向かって内弯気味に大きく広がるもの、外反するものなどがあり、波状口縁のものもある。爪形文には棕櫚状のC字形（連続）爪形文や、側線を伴うC字形II型爪形文（網谷1982）などがある。文様は爪形文を横位に巡らすもの、横位の鎖状に施すもの、弧状文を描くものなどがある。凸帯を貼付するものは、口縁部に凸帯を横位に巡ら

せ、凸帶上に縦位の刻みや爪形文を施すものなどがある。爪形文や凸帶文は幅広の無文の口縁部に施され、頸部以下は斜縄文や羽状縄文が施される。深鉢以外では、薄手で半截竹管や爪形文で幾何学文を描き、文様の無文部や内面口縁部等を赤彩する鉢や、口縁部が内折する浅鉢なども出土する。その他、諸磯 a 式から諸磯 b 式古段階の土器を伴う。

〈中切上野遺跡 SB13〉(図2)

当住居跡では凸帶上に鋭い斜位の刻みを施す深鉢が多く出土している。凸帶上に縄文を施すものはほとんどない。器形は口縁部が緩やかに内弯する。口唇には半截竹管等による刺突や刻みを施すものが多く、口縁部の凸帶が口唇部に巻き上がるものも多い。文様は凸帶で梯子状の文様を施すものや、最下段の凸帶から基部に三角形の取り付いた溝文を垂下させるものも見られる。凸帶は縄文地文の上に貼付され、凸帶間に縄文はほとんど確認できない。縄文は斜縄文が多いようであるが、羽状縄文のものも見られる。これらの胎土は長石等が目立ち、内面も整形に伴う凹凸が目立つ。このほか、縄文施文や無文の深鉢も出土する。器形は口縁部が外反するもの、外傾するもの、わずかに内弯するものなどがある。深鉢以外では薄手で半截竹管により溝文や三角形区画文を描く赤彩の鉢類や有孔浅鉢が多く出土する。有孔浅鉢は厚手で、有文のものと無文のものがあり、有文のものは半截竹管により三角形や木葉文を描く。沈線間には刻みが密に施される。漆彩のものも出土している。無文のものは口縁部がわずかに立ち上がるものが多い。その他、北白川下層 IIc 式(鈴木 2008a)や諸磯 b 式中2段階から諸磯 c 式併行の土器が出土している。諸磯系の土器については、やや厚手で胎土に雲母が目立ち、内面が平滑に調整されるものが多い。

〈中切上野遺跡 SB3〉(図3)

当住居跡では凸帶上に縄文を施す深鉢が多く出土している。凸帶の多くは2~3条で、凸帶上に爪形文や刻目を施すものも出土しているが、縄文を施すもの、無文のものに比べて数は少なく、刻みも小振りである。器形は口縁部が内屈するものが多く見られる。口唇部に刻みや縄文を施すものもあるが、数は少ない。口縁部の凸帶が口唇部に巻き上がるもの、最上段の凸帶が口唇に接して貼付されるものも見られる。文様は口縁部を廻る凸帶が弧を描いて口唇部へ伸びるもの、三角形を描くもの等が見られる。凸帶は縄文地文の上に貼付され、凸帶間に一部縄文が残るものもある。縄文は斜縄文が大半で、R L が優勢、頭嗣部境の屈曲部付近の縄文をなで消しているものもある。このほか、縄文施文や無文の深鉢も出土する。器形は口縁部が外傾するものが多く、内弯するものもあり、口唇部は縄文や押圧等を施すものもある。深鉢以外では薄手で半截竹管により三角形区画文や弧状の区画文等を描く赤彩の鉢類や有孔浅鉢が多く出土する。有孔浅鉢の内、有文のものは三角形や木葉文を描くが、数は少ない。漆彩のものも出土している。無文のものは口縁部が立ち上がるものが多く、肩部が暎状のものや直線的に折れるものも見られる。その他、諸磯 b 式新段階から諸磯 c 式併行の土器が出土している。

〈中切上野 SB9〉(図4)

当住居跡では口縁部に縦位や渦状の結節浮線文を有する土器が多く出土している。凸帶を有する土器は SB3 と同様に縄文施文のものを主体とし、無文のもの、小振りの刻目施文のものがある。凸帶は4条以上貼付するものや、文様を描くものも見られる。器形は口縁部が内屈もしくは内折するものが多い。縄文施文や無文の深鉢は、口縁部が外傾するものが多く、内弯・内折するものもあり、口唇部は縄文や押圧等を施すものもある。縄文は RL が優勢である。薄手の赤彩土器は半截竹管で溝文等を描く。有孔浅鉢は口縁部の立ち上がる無文のものが多く、有文のものでは三角形を描くもの等が出土している。沈線間には刻みが密に施される。その他、諸磯 b 式新段階から諸磯 c 式併行の土器が出土している。

〈各土器群の位置づけ〉

次に、これらの土器群の時期的位置づけについて、隣接地域の編年を参考にして検討したい。

村山遺跡出土資料については、爪形文施文の土器が特徴的である。東海・関西ともに爪形文から凸帶文へと変遷することから、当地方でも同様の変化を考え、凸帶文を有する他の3つの土器群に先行するものと考えられよう。なお、当資料は島中通遺跡出土資料と似た様相を示している。島中通遺跡資料については、C字形II型爪形文を施す土器と、刻目を有する凸帶を貼付する土器の同時性について、縄文セミナーの席上で議論がなされている（縄文セミナーの会 1999）。現在公表されている飛騨の資料には、それぞれお互いを交えずに出する資料がなく、ここでは村山遺跡段階¹⁾として一旦把握し、今後の資料の増加により実態が明らかにする機会を待ちたい。

凸帶を有する土器は、田中の指摘のように中部地方（東海地方）に類例が多い。東海では凸帶上の施文が刻目を有するものから縄文を有するものへと変遷する。本稿の土器群でも凸帶上に刻目を有する中切上野遺跡 SB13 出土土器と、縄文を有する同 SB3 および SB9 があり、変化の方向性は東海と共通すると考えられること、有孔浅鉢の有文のものの割合や諸磯系土器の様相などから、中切上野遺跡 SB13 出土資料は SB3 および SB9 出土資料に先行する段階のものと考えられる。

なお、東海の凸帶上に刻目を有する土器は、斜位の刻目のものから鋸歯状の刻目のものへと変遷するようであるが（増子 1998）、飛騨では鋸歯状の刻目をもつ土器がまとまって出土する資料が現在のところ発見されていない。個体としては確認できるため、今後このような資料群が発見されることも考えられるが、現状では不明としておきたい。

中切上野遺跡 SB3 出土土器と SB9 出土土器は、共に凸帶上に縄文を有する土器を多く出土するが、SB9 出土土器には SB3 よりも条数の多いものや文様を描くものがある。また、口縁部も SB3 よりしっかりと屈曲するものが見られる。東海の凸帶上に縄文を有する土器は、条数が少条のものから多条のものへ、口縁部が直立するものから内折するもの、内折する口縁部が短くなるものと変遷するようである（増子 1996）。東海の土器変遷の方向性と諸磯系土器の様相から、中切上野遺跡 SB3 段階から中切上野遺跡 SB9 段階へと変遷すると考えられる。

なお、両住居跡からは半截竹管施文の赤彩土器が多数出土するが、東海ではこれらの段階においては半截竹管施文の赤彩土器は消失へ向かうようである。有孔浅鉢も諸磯c式段階では沈線施文を有するものは消失するとのことから、各段階の組成については更に検討が必要である²⁾。

最後に、中切上野遺跡 SB9 段階以降の様相について若干触れておきたい。中切上野遺跡では SB9 段階以降の資料はほとんど見られなくなる。これ以降の資料は的場遺跡 SB22 や宮ノ前遺跡、向畠遺跡 SB05 などで中切上野遺跡 SB9 出土土器よりも多条化の進んだ凸帶貼付土器が、的場遺跡 SB23 や向畠遺跡 SB06 などで北白川III式（鈴木 2008b）併行の土器が出土する。また、宮ノ下遺跡からはそれらに加えて三角形陰刻文をもつ十三菩提式併行の土器が多数出土している。

2. 集落の様相

縄文前期後半の住居跡は、10 遺跡から 55 基が報告されている。飛騨の住居跡数は中期後葉に最多となるが、前期後葉はその前段階から 10 倍以上増加し、小さなピークを迎える時期である（岩田他 2003、大石 2011）。

住居の形態は、形態のわかるもの 44 基中、円形・楕円形・不整円形等のものが 37 基と大多数を占め、隅丸方形等のものは 7 基報告されている（図 5・6）。前段階の住居跡は堂之上遺跡から神之木式併行段階のも

のが4基、有尾式・黒浜式併行段階のものが2基報告されている。この内、小型の特殊例とされるものを除きプラン形状のわかるものはいずれも方形または不整方形を呈しており、前期後半で住居形態に大きな変化が見られる。住居の規模については長軸5m前後のものが多く、75%は4.0m～5.5mの範囲に収まる。最大は村山遺跡の住居で長軸7.4m、次いで的場遺跡SB22は長軸6.8mを測る。また、最小は的場遺跡SB12で長軸2.4mである。柱穴については明確な配置を示すものは少なく、5本以上の柱穴がプラン内に散在するものが多い。壁柱穴をもつものは9基、壁の外側に柱穴が並ぶものは8基報告されている。

炉については確認できたものの39基中地床炉をもつものが36基と大半を占め、その他は石囲炉が中切上野遺跡SB15（図7）および的場遺跡SB7で、埋甕炉が的場遺跡SB23（図8）で報告されている。石囲炉・埋甕炉とともにこれらの例が飛騨の初現例である。石囲炉については中期前葉でも向畠遺跡で3基見られるのみであり、飛騨全城から確認できるのは中期中葉以降である。埋甕炉については中期前葉で1基、中期中葉でも1基しか確認できないが、美濃では中津川市で前期後半の例が3遺跡4基報告されており（春日井他2003）、飛騨南部からの地理的近さも踏まえ、関係が注目される。

次に、集落の様相について触れておきたい。飛騨の前期後半の遺跡から検出された住居跡数は、中切上野遺跡の15基、的場遺跡の19基を除けばいずれも5基以下である。このうち、集落のほぼ全城を調査した堂之上遺跡でも、前期後半の住居跡は3基（内1基は住居を拡張したと考えられるため、延べ4基）しかなく、当概期における一時期の集落の構成軒数は5軒以下が一般的であったと思われる。多数の住居跡を検出した中切上野遺跡や的場遺跡でも、各段階の住居跡数は5基以下のようである。

遺跡内の住居跡の配置については、的場遺跡では各段階の住居の累積の結果が直径70m程の馬蹄形の配置を示すようである（図9）。これに対し、中切上野遺跡は環状・馬蹄形等の配置を示さず散在する（図10）。この違いの一因は、飛騨川の高位段丘上に位置する的場遺跡に対し、中切上野遺跡が盆地縁辺の尾根上の斜面に位置することもあるのである。台地上に位置する向畠遺跡等では台地の縁辺近くに住居が構築される例が見られる。なお、舌上台地の先端近くに位置する堂之上遺跡では、有尾式・黒浜式併行段階において、住居跡数は少ないものの土壙群を囲むような住居の配置が見られ、飛騨における環状集落の初現と見ることもできよう（戸田2001）。

3. 峰一合遺跡の再評価に向けて

峰一合遺跡は昭和41年から46年にかけての発掘調査により、住居跡6基（弥生時代の竪穴住居跡1基を含む）のほか、縄文時代前期後半の多数の遺物を出土し、大きな成果を上げた。最後に峰一合遺跡について、今後の課題と共に述べておきたい。

峰一合遺跡の縄文土器は大川式併行のものから出土するが、主体を占めるのは前期後半の村山遺跡段階から中切上野遺跡SB9段階あたりまでである。中期中葉までの土器も見られるが、それ以降は後期前半の土器が断片的に出土するのみとなる。前期後半の土器については中切上野遺跡等、飛騨中央部の土器と非常によく似ており、これらが東海地方との関係が深いことから、東海地方との中间に位置する峰一合遺跡の様相は重要な意味合いがある。器形、文様、製作・施文技法、組成等について、さらに詳しく検討を加えた上で、周辺地域と比較をして全国の中に位置づけるとともに、飛騨内部での地域性を把握することが重要であろう。

峰一合遺跡の集落については、発掘面積も限られており、全体像は知り得ないが、舌上台地の縁辺近くに竪穴住居跡が展開するようであり、中央広場を意識した配置である可能性も考えられよう。住居についても、峰一合遺跡SB3は当概期の典型例であり、またSB4は不定型な楕円状と報告されているものの、堀方の形

状は方形に見える。的場遺跡の例から飛騨南部は中央部より方形の割合が高いようであり、的場遺跡における埋甕炉の存在もあわせ、飛騨内部の地域性について遺構からも検討ができる。

本稿作成にあたり、下呂ふるさと歴史記念館で開催された土器見学会において、参加者各位からご指導いただきいた。深く感謝すると共に、お名前を記さない非礼と、ご指導内容を十分に活かしきれないことをお詫びします。

(註)

- 1) 本稿で取り上げた資料群はいずれも前後の時期の資料を含むため、出土遺物の同時性については現時点では推定にとどまる。本稿では飛騨の縄文前期後半の様相を検討するために、各資料群をもとに「段階」を設定するが、いずれも時期幅を有するものであり、全国の型式網の中に飛騨を位置付けるための作業上のものである。
- 2) 中切上野遺跡SB9出土資料について、報告書の中で田中は「時期を異にする住居址遺構の擾乱」を指摘している。

(引用・参考文献)

(論文等)

- 赤木 清 1935 「江名子糠塚の土器（一）」『ひだびと』3-3 飛騨考古土俗学会
- 網谷克彦 1982 「北白川下層式土器」『縄文文化の研究』3 縄文土器 I (株)雄山閣
- 岩田崇・大石崇史 2003 「飛騨の縄文住居」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』(有)六一書房
- 大石崇史 2011 「飛騨の縄文集落」『季刊考古学』114 (株)雄山閣
- 春日井恒・長谷川幸志 2003 「岐阜県美濃地方における縄文時代建物遺構の変遷」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』(有)六一書房
- 縄文セミナーの会 1999 「第12回縄文セミナー 前期後半の再検討 —記録集—」
- 鈴木康二 2008a 「北白川下層式土器」『絶賛 縄文土器』(株)アム・プロモーション
- 鈴木康二 2008b 「特殊凸縦文系土器（北白川III式・大岳山式土器）」『絶賛 縄文土器』(株)アム・プロモーション
- 戸田哲也 2001 「岐阜県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
- 増子康就 1996 「縄文前期後半・大麦田式土器の再検討 —岐阜県御望・市場遺跡の再検討—」『古代人』57 名古屋考古学会
- 増子康就 1998 「第4部 小御所遺跡」『上村川下流域の考古学的調査』上矢作町教育委員会

(発掘調査報告書)

- 塙屋雅夫・大野政雄 1960 『村山道路』斐太中央印刷(株)
- 大江まさる他 1983 『鳥中通道路発掘調査報告書』白川村教育委員会
- 大江まさる他 1983 『糠塚遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会
- 大江まさる他 1988 『向畠遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会
- 大江まさる他 1984 『向畠遺跡の遺物』高山市教育委員会
- 大江まさる他 1993 『的場遺跡』萩原町教育委員会
- 河野典夫他 1998 『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』岐阜県・宮川村教育委員会
- 田中 彰 1999 『中切上野遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会
- 野村宗作他 1988 『宮ノ下遺跡発掘調査報告書』国府町教育委員会
- 吉田英敏 2003 『峰一合遺跡』『発掘調査報告書』下呂町教育委員会

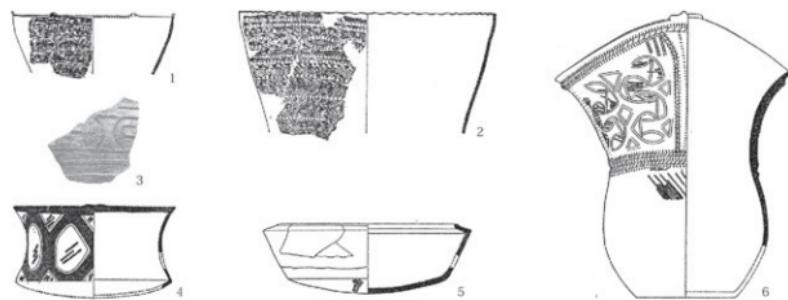


图1 村山遗迹出土器

(復原図1/8 拓本1/6)



图2 中切上野遗迹 SB13 出土器

(復原図1/8 拓本1/6)

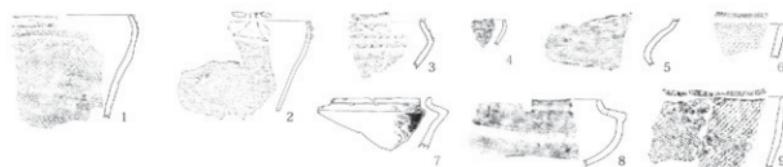


图3 中切上野遗迹 SB3 出土器

(拓本1/6)

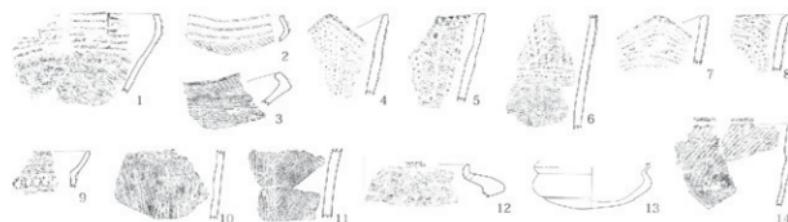


图4 中切上野遗迹 SB9 出土器

(復原図1/8 拓本1/6)

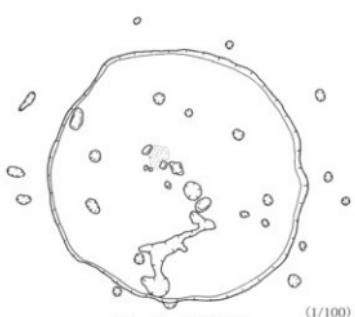


図5 峰一合遺跡SB3

(1/100)

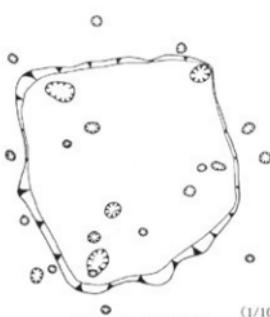
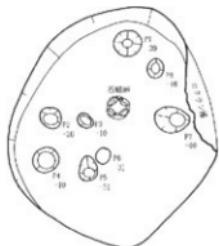


図6 峰一合遺跡SB4

(1/100)



(1/100)

図7 中切上野遺跡SB15



図8 的場遺跡SB23

(1/100)

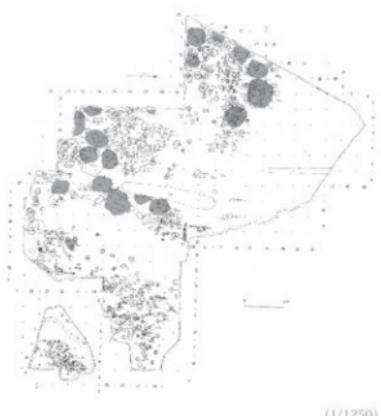


図9 的場遺跡遺構配置図（第2地点・中間地点）



図10 中切上野遺跡遺構配置図

(1/1250)

縄文時代前期後半の飛騨地方の地或生についての予察 ～北白川下層式・特殊凸帯文系土器と芦戸式土器、そして「器形」から～

鈴木康二（公益財団法人滋賀県文化財保護協会）

はじめに

本稿では、峰一合遺跡で出土した縄文時代前期土器を中心に、北白川下層式土器様式・特殊凸帯文系土器様式や併行する諸型式の土器など周辺資料を考慮しながら、当時の「地域性」を考えるべく現状を整理してみたい。

1. 峰一合遺跡出土の前期土器概観

2003年12月に刊行された報告書によれば、峰一合遺跡で出土している縄文土器は、前期では北白川下層II～III式・諸磯b～c式土器がその主体として記され、加えて大歳山式土器も一定量確認されている。そのほか「無文」あるいは「縄文地文」として分類された土器片も、土器片全体の約9500点の内の、約7割6600点程度見つかっていると提示されている。他に早期・中期の土器も出土していることから、無文・縄文地文土器片の全てが前期に帰属するものではない可能性は高いが、一定量含まれていることを考慮する必要はある。

未報告資料も含めて、実際に資料を瞥見してみると北白川下層II c式と諸磯系の土器がその主体のようだ。ちなみに出土した土器の大半は破片資料であるが、一部「器形」を判断できるような資料も、諸磯系土器と縄文地文系土器にわずかに見られる。

なお、器形が復元されている縄文地文系土器は、報告では北白川下層III式として理解されているようであるが、筆者は、基本的には北白川下層II式段階の資料として考えている。その理由としては以下の二点が挙げられる。

一つは、北白川小倉町遺跡での出土状況に依る。基本的に当該様の土器が一定量出土しているが、いずれも北白川下層II式以前の土器と同一の層位から出土している。

もう一つは、現時点で確認できている底部資料の様相に依る。筆者は、北白川III式および大歳山式土器の底部には、その端部に刺突あるいは押圧による施文が見られることが、その特徴と考えている（図1）。峰一合資料では、報告資料あるいは実見できた未報告資料中においても、ほとんどこの種の底部は認められなかった。従って、北白川III式ないし並行期の土器は含まれていない可能性が高いと考えている。つまり底部の大半は北白川下層II c式以前のものと思われる。なお、大歳山式

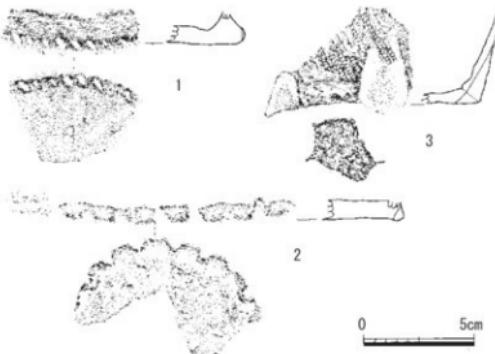


図1 特殊凸帯文系土器の底部
※1→2→3という変遷觀が考えられている。1・2は北白川III式、3は大歳山式的底部（いずれも滋賀県上出A遺跡出土）

表1 繩文時代前期後半の分類別土器出土傾向

遺跡名	北白川下層式	特殊凸帯文系	東海系	芦戸系	口縁部屈曲	鏡ヶ森系	刈羽系	鍋屋町系	諸磯系	利根川下層文系	頭塙系	縄文地文
島中通	○			○	○	△		△	○	△		○
的場	○	○		○	○	△			○	○		○
峰一合	○	○		△	○	△	△		○	○		○
芦戸	△	△	△	○	○	?			○	○		○
松原	△	△		△	○				△			○
御望	△	○	△	○	○	?		○	○	○		○
上原		○		○	?			○		△		?
落合玉郎	○	○			○				○	○		
阿曾田	△	○		△	○				○	○		○
小御所	△	○	△					△	○			○
大妻田	△	○	△		○				○			○
花無山	○		△		△				○			○
ヒロノ	△	○	△		△				○	△		○
水汲	○	○	△	○	○	?			○	○		○
青津前田	△		△						○			○
清水ノ上	△	○	△					△	△	△		○
山添	○	△		△	○				○			○
入江内湖	○	○			?				○			?
上出A	○	○			△	?			△	△	△	○
下鉢	○	○							○			○
津田江湖底	○	○							○			○
元白川小曾町	○	○		△	△				△			○

※1 報告書掲載図を元に分類している。

※2 凡例 ○有り △少少量有りもしくは分類基準再検討の余地有り ?: 分類型式の認定に自信無し

※3 指頭圧痕系土器については今回は触れていない。

期の土器片は前述の通り一定量確認されてはいるものの、該当する底部資料は現時点では確認できていないことから、こちらについても主体的な利用のあった土器ではない可能性を考えておく必要がある。

2. 該期の周辺資料との比較

(1) 分類基準

表1は、飛騨地域から三河東北部地域を中心に、近江や標式遺跡の状況も含めて、前期後半の土器の型式・分類別の出土傾向を大まかに整理したものである。簡単に分類基準等について概観しておきたい。

北白川下層式系、特殊凸帯文系については、詳細は拙稿（鈴木2008）等を参照いただきたいが、前者は從来のいわゆる北白川下層式、後者は北白川III式（従前の北白川下層III式）～大歳山式を中心とする特殊凸帯文を持つ土器を該当させている（図2・3）。

東海系は、小御所式や清水ノ上3式、大妻田式などを含む、主に東海圏を中心に型式設定された該期の土器を当ててはいるが、筆者自身これらの土器群と、北白川下層式土器とを明確に区別する基準を未だ持ち得ていないこともあり、現時点では仮にその可能性のあるものを当てはめている。

芦戸系は、標式資料である芦戸遺跡の報告で示されたI式～III式土器もしくはそれに類似する資料を一括して当てている（図4）。この芦戸系土器は、I～III式という3細分型式の有効性と、その一方でこれらの土器群全体では成形方法や胎土等において斉一性が高く、まとまりのある土器群として捉えるべきものと考えている。残念ながら資料の出土状況等が良好ではないことから、その変遷観までは検討できないものの、地域間での交流等を考える際には、指標として有効な型式の一つと考えている。なお、「口縁部屈曲」として示したものは、一部に芦戸II式を含みつつ、口縁部を内側に屈曲させ文様

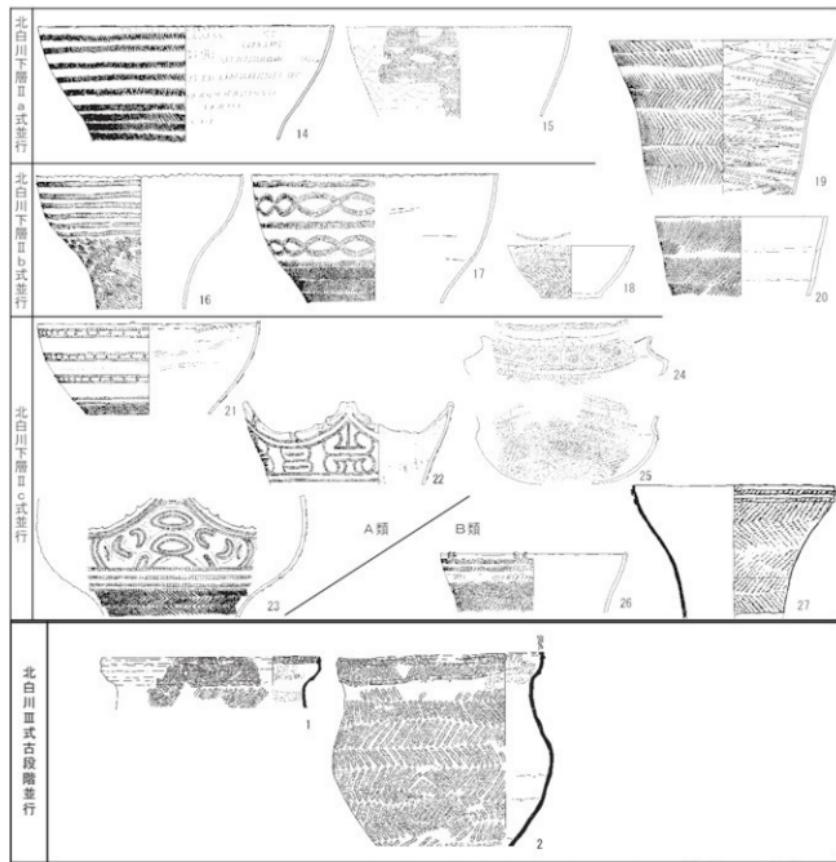


図2 北白川下層II式～北白川Ⅲ式古段階の土器細別編年案
『総覧縄文土器』より

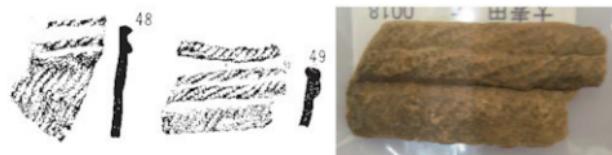


図3 北白川Ⅲ式古段階の土器(愛知県大麦田遺跡出土)

帶をその口縁部に集約させた一群を当てはめている。

焼ヶ森・刈羽・鍋屋町系については、北陸を中心に日本海側で確認されている諸型式に類似した資料を当ててはいる。また諸磯系、踊場系は、型式細別および器種の別は無視して大きくまとめているし、結節状浮線文系については、いわゆる十三菩提式を中心には類似する土器を当てはめている。

縄文地文系は、地文に縄文を付した、特に顕著な文様を施さない一群である。口縁端部に刺突文・押圧文を施すものも一部にあり、また口縁部直下に地文をナデ消した無文帶を持つものもこの類に含めている。

(2) 概観

この表から看取できるのは、特に飛騨地域を含む当該地域においては、北白川下層系と諸磯系、さらに縄文地文系土器は、量の多寡はあるものの概ね基本的に認められる点であろう。その一方で、特に飛騨地域を中心に認められる芦戸系は、当該地域の地域性を考える上で注視される。

また「口縁部屈曲」とした土器は、峰一合遺跡などで一定量確認されている(図5)。一方飛騨地域以外では、京都府北白川小倉町・滋賀県上出A・三重県山添遺跡などで類例(図6)が確認されてはいるものの、いずれも客体的な比率でしか認められない。つまり、「口縁部屈曲」土器は、飛騨から三河東北部に比較的多く分布する傾向が看取されることから、先ほどの芦戸系とも関連しつつ、さらに少し広範な地域性を示しているのかも知れない。

そもそも、芦戸II式の成立そのものも現状では十分な整理はできており、周辺諸型式との関係性など取り巻く状況等を含めて今なお課題は多く、注意しておきたい点である。

ちなみに、特に図6に掲載した資料は、北白川下層IIc式期の沈線施文の土器であり、凸帯貼付を基本とする

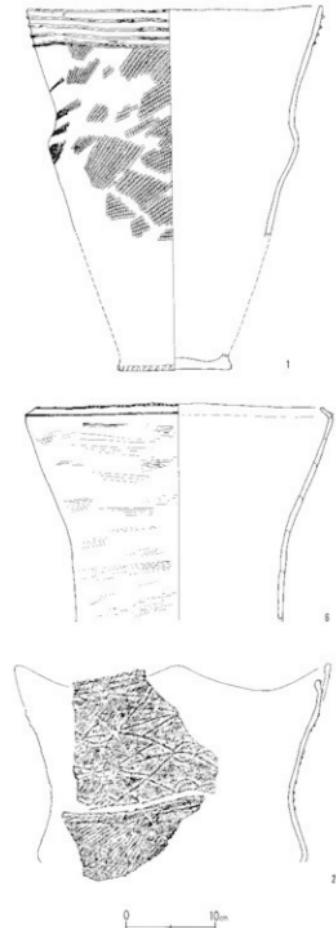


図4 「芦戸式土器」(上からI・II・III式)
(坂祝町芦戸遺跡出土)

北白川下層IIc式土器との関係性について検討の余地の残る資料であり、また文様帶モチーフの様相からは北陸系あるいは中部・関東系の土器との関係についても検討する必要があろう。いずれも今後の課題としておきたい。

図5 口縁部が内側に
屈曲している土器
(下呂市峰一合遺跡出土)

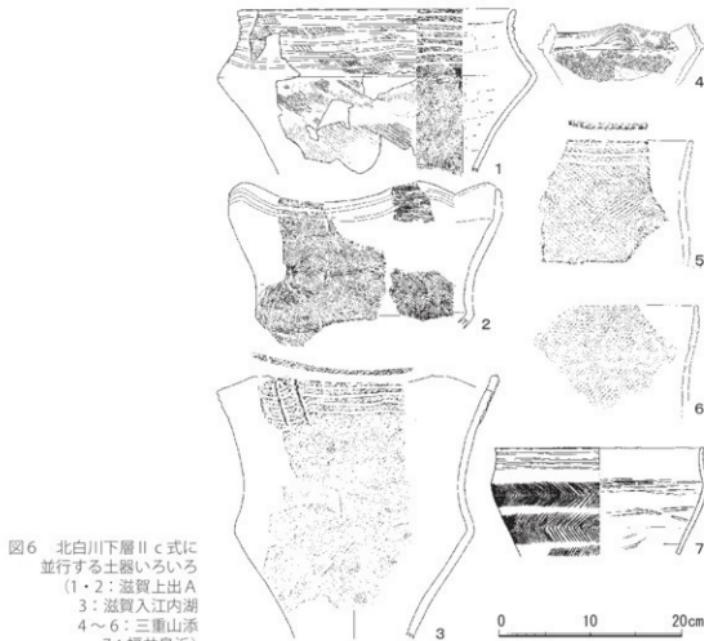
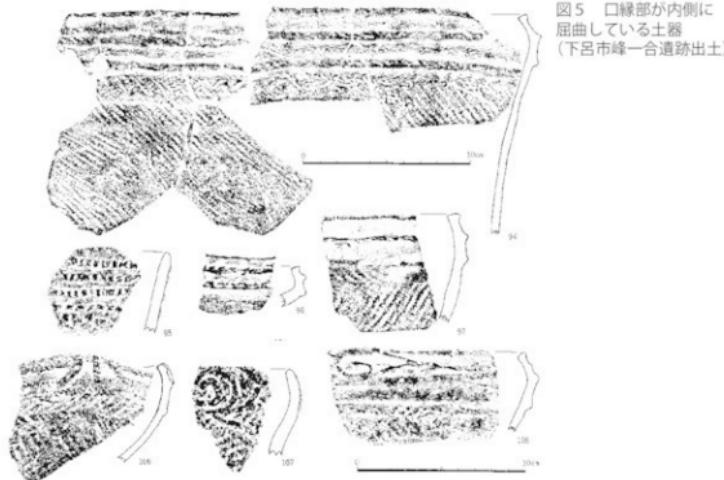


図6 北白川下層IIc式に
並行する土器いろいろ
(1・2:滋賀上出A
3:滋賀入江内湖
4~6:三重山添
7:福井鳥浜)



図7 北白川III式古段階の土器
(愛知県水汲遺跡出土)

3. 特殊凸帯文系土器についての課題

峰一合遺跡では、前述したとおり、特殊凸帯文系土器については大歳山式土器の口縁～体部片は若干確認されているものの、底部片は今のところ認められない。また、先行する北白川III式については、今のところ確認できていない。従って、全段でも少し触れたが、底部片の見つからないことをどう評価するか、という課題は残るが、現時点では改まった見解等は持ちえていない。今後の課題としておきたい。

ただ、当該期の資料に連して気になる事実が一点あるので触れておきたい。長野県大桑村万場遺跡出土の大歳山式土器（図8下）についてである。水汲報告（鈴木2011）で触れた北白川III式古段階の土器（図7）の胴部下半内面の「爪痕」（図8上）と類似する爪痕が、同じくその土器の内面胴部下半に認められる点である。単に表層的なつながりではなく、両者が技術的に関係性をもっている可能性を示唆するものと考えている。今後類例を探しつつ検討してみたい。

終わりに

縄文時代前期の土器型式の認定・分類や、地域性を弁別する観点については未だ課題が多い。本稿では筆者の不勉強から、雑駁な問題提示に終始してしまった感は否めない。また、紙幅の都合から、参考文献等割愛させて頂いた。併せてご海容いただきたい。



図8 胴部内面の「爪痕」の様子

上：愛知県農田市水汲遺跡出土：北白川III式古段階
下：長野県大桑村万場遺跡出土：大歳山式土器

峰一合遺跡出土「パン状炭化物」と炭化した食物の分析例

中村賢太郎 (株式会社パレオ・ラボ)

1. はじめに

縄文時代の食生活に関する研究は、動物遺体や植物遺体の同定結果に基づいて行われることが多い。ただし、動物遺体の出土は貝塚や洞穴遺跡などを除けば出土量が少なく、堅果類など植物遺体の出土も水分に富む堆積物がある低地の遺跡に偏っている。また、人骨コラーゲンの炭素・窒素安定同位体比に基づく古食性の推定も有効であるが、分析に耐える良好な状態の人骨が出土する遺跡はやはり限られている。

一方で、炭化物は、遺跡の立地条件にかかわらず、残りやすい。たとえば、炭化した種実はフローテーション法の普及により検出される遺跡が多くなってきた。また、土器の内面を注意深く観察すると、付着炭化物が確認される土器が多い。さらに、峰一合遺跡でも出土した「パン状炭化物」や「クッキー状炭化物」と呼ばれる炭化物塊は、縄文時代の32 遺跡から約 210 点(中村耕作, 2007)と、日本列島東部を中心とする各地から出土している。炭化した食物は、縄文時代の食生活を明らかにするための有効な試料の1つである。ここでは、峰一合遺跡出土例を中心に、科学的方法により明らかとなった炭化食物の素材について紹介したい。

2. 炭化した食物の素材を調べる方法

炭化した食物を顕微鏡で観察し、素材の形態が残っていれば、現生標本の形態と比較することで、素材の種類を同定することができる。しかし、炭化による変形で素材の形態を失ってしまった試料については、炭素や窒素の安定同位体比を用いた科学的方法により、素材を推定することになる。

原子番号が同じで、質量の異なる原子同士を、互いに同位体と呼ぶ。同位体は陽子の数が同じで、中性子の数が異なる。化学的性質はほとんど変わらない。たとえば、炭素には¹²C、¹³C、¹⁴C の3種類、窒素には¹⁴N、¹⁵N の2種類の同位体がある。同位体には、時間の経過と共に放射線を出しながら壊変する放射性同位体と、時間が経過しても壊変しない安定同位体の2種類がある。炭素を例にすると、¹⁴C は放射性同位体、¹²C、¹³C は安定同位体である。

一般に、炭素の安定同位体である¹²C は存在度が 98.9%、同じく¹³C が 1.1%、窒素の安定同位体である¹⁴N は存在度が 99.63%、同じく¹⁵N が 0.37% である。しかし、安定同位体の存在比(安定同位体比)は、植物の光合成回路の違いや動物の食物連鎖における階層の違いにより、オズカではあるが変化する。光合成の過程で、炭素数3のホスホグリセリン酸を最初に作るC₃植物はδ¹³C が低く、炭素数4のジカルボン酸を最初に作るC₄植物はδ¹³C が高い。また、動物の体内では重い¹⁵N が濃縮し、食物連鎖の上位に居る動物ほどδ¹⁵N が高くなる。炭化した食物の安定同位体比を調べ、植物(C₃植物、C₄植物)や動物(草食動物、海産貝類、海産魚類、海獣、サケ類)の安定同位体比と比較することで、素材を推定することが可能となる。

安定同位体比は、標準試料(炭素はPeeDee 層出土のペレムナイト化石、窒素は大気中の窒素ガス)からの偏差(千分率)で記される。

$$\text{炭素安定同位体比: } \delta^{13}\text{C} (\text{\%}) = [({}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C})_{\text{sample}} / ({}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C})_{\text{std}}] - 1 \times 1000$$

$$\text{窒素安定同位体比: } \delta^{15}\text{N} (\text{\%}) = [({}^{15}\text{N}/{}^{14}\text{N})_{\text{sample}} / ({}^{15}\text{N}/{}^{14}\text{N})_{\text{std}}] - 1 \times 1000$$

炭素・窒素安定同位体比を用いて日本列島における古食性を復元する研究は人骨コラーゲンを用いて行われて

いた（南川，1993・2001）。その後、炭素・窒素安定同位体比を用いて土器付着炭化物の起源となった煮炊き内容物の研究が進められた（吉田，2004；坂本，2007；工藤ほか，2007・2008；宮田，2008；工藤・山本，2009；國木田ほか，2009；工藤・佐々木，2010）。最近、國木田大たちにより炭素・窒素安定同位体比を用いる方法がパン状炭化物（クッキー状炭化物）に応用されるようになった（國木田ほか，2009；國木田・吉田，2010）。

3. 峰一合遺跡のパン状炭化物

岐阜県下呂市に位置する峰一合遺跡より検出された縄文時代前期のパン状炭化物を対象として、素材を調べるために、マイクロスコープによる形態観察、炭素と窒素の安定同位体比測定および炭素窒素比測定を行った。

3. 1. 試料

試料は、昭和45年の発掘調査で、縄文時代前期の土器を包含する層より出土したパン状炭化物1点である。パン状炭化物の放射性炭素年代測定（山形，2003）では、¹⁴C年代が 5100 ± 80 ¹⁴C BP、校正年代（IntCal09, 1σ：確率 68.2%）が 5922–5746 cal BP（3973–3797 cal BC）の結果が得られている。この年代は、縄文土器編年と¹⁴C年代との対応関係（小林，2008；工藤，2012；関根，2008；鈴木，2008）を参照すると、縄文時代前期の諸磣式や北白川下層II～III式に相当する。

3. 2. 分析方法

形態観察は、主に株式会社キーエンス製のマイクロスコープを用いて行った。その他に肉眼観察と実体顕微鏡による観察を併用した。

炭素・窒素安定同位体比および炭素窒素比の測定を行うために、破片化した塊を1片採取し試料とした。試料は、酸・アルカリ・酸洗浄 (HCl:1.2N, NaOH:1N) を施して不純物を除去した後、測定を行った。

炭素含有量および窒素含有量の測定には、元素分析計（ガス化前処理装置）の Flash EA1112 (Thermo Fisher Scientific 社製) を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。

炭素安定同位体比 ($\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$) および窒素安定同位体比 ($\delta^{15}\text{N}_{\text{air}}$) の測定には、質量分析計である DELTA V (Thermo Fisher Scientific 社製) を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比が IAEA Sucrose (AN)、窒素安定同位体比が IAEA NI を使用した。

測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、元素分析計内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させた。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムで CO₂ と N₂ を分離し、熱伝導度検出器でそれぞれ検出・定量を行った。この時の炉および分離カラムの温度は、燃焼炉温度 1000°C、還元炉温度 680°C、分離カラム温度 45°C である。得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいて炭素窒素比 (C/N 比) を算出した。分離した CO₂ および N₂ はそのまま He キャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

3. 3. 結果

パン状炭化物は、およそ 13 × 10 × 2 cm の平たい形状である。1~2 cm の球状あるいはやや角張った塊が集合している。それぞれの塊を観察すると、タマネギの皮のように同心円状の多層構造が見られた。

表 1 に、試料名と炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N 比を示す。図 1 は、

炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係を示したものである。

表1 結果一覧表

試料名	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}_{\text{AIR}}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比
パン状炭化物	-25.7	-2.92	66.2	0.475	162.53

3.4. 考察

球状で同心円状の多層構造を持つ有機物としては、ユリ科の鱗茎が考えられる。例としては、ギョウジャニンニクやノビルなどがある。

炭素と窒素の安定同位体比を示した図1では、パン状炭化物の値はC₃植物に近く、パン状炭化物はC₃植物に由来する可能性が高い。また、パン状炭化物は、C/N比が30~50と高い堅果類など（ミズナラ、トチ、ヤマユリなど）のデンプンよりもさらに高い値を示し、いわばその比較対象からも外れている。動物に比べ植物はC/N比が高い傾向にあるため、パン状炭化物がC₃植物である可能性を示す図1の結果と矛盾はない。

パン状炭化物を構成する塊はユリ科鱗茎の可能性が考えられ、炭素・窒素安定同位体比もC₃植物（ユリ科を含む）を示す値であったことから、パン状炭化物はユリ科の鱗茎が集合したものが炭化したと考えられる。なお、ユリ科の鱗茎以外のものが含まれていた可能性もあるが、それがあったとしても動物質ではなく、C₃植物であったと考えられる。

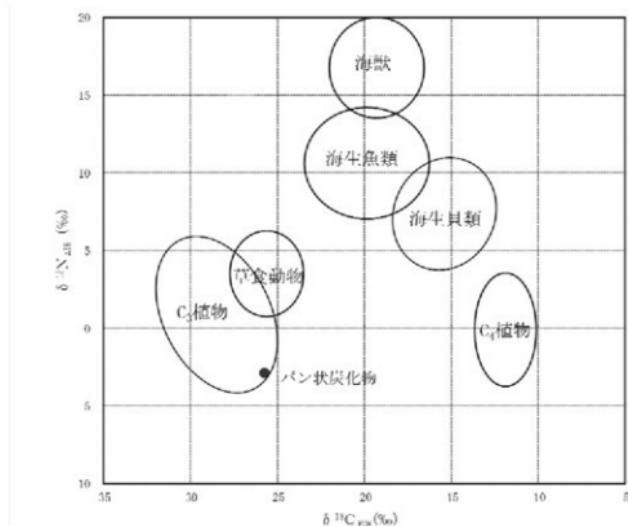
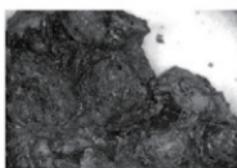


図1 峰一合遺跡出土パン状炭化物の炭素・窒素安定同位体比

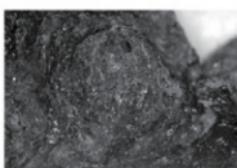
(Yoneda et al. (2002)に基づいて作成)



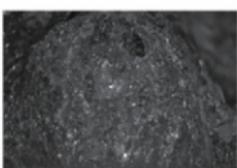
1



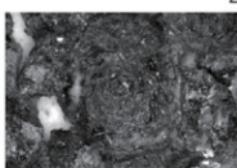
2



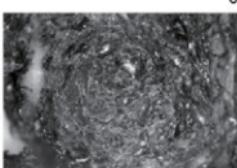
3



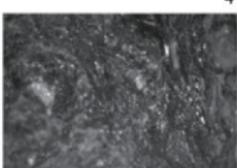
4



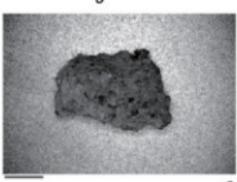
5



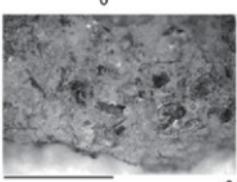
6



7



8



9

図版1 パン状炭化物

1. 全体 2～4. ポイントA拡大 5～7. ポイントB拡大 8・9. 安定同位体比測定に用いた破片

4. 他遺跡の分析例

4. 1. 東海地方

- ・寺部遺跡（愛知県豊田市）

藤根久・山形秀樹（2011）により、縄文時代後期前葉～中葉の土器内面付着炭化物について、 $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ 、C/Nの測定と顕微鏡観察が行われ、炭化物の素材はユリ科ネギ属の鱗茎と考えられた。

4. 2. 関東地方

- ・下宅部遺跡（東京都東村山市）

工藤雄一郎・佐々木由香（2010）により、縄文時代中・後・晚期の土器内面付着炭化物について、 $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ 、C/N測定と顕微鏡観察が行われ、炭化物の素材としてユリ科鱗茎などの植物が考えられた。

4. 3. 北陸地方

- ・沖ノ原遺跡（新潟県津南町）

國本大・吉田邦夫（2010）により、縄文時代のクッキー状炭化物について、 $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ 、C/Nの測定と顕微鏡観察が行われ、堅果類のデンプンが主成分と考えられた。

4. 4. 東北地方

- ・押出遺跡（山形県高畠町）

國本大・吉田邦夫（2010）により、縄文時代前期のクッキー状炭化物について、 $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ 、C/N測定が行われ、堅果類のデンプンが主成分と考えられた。また、比較対象の土器付着炭化物は動物資源の影響が考えられた。

4. 5. 北海道

- ・北黄金2遺跡（北海道伊達市）

山形秀樹・中村賢太郎（2011）により、縄文時代前期後半の土器内面付着炭化物について、 $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ 、C/N測定が行われ、炭化物の素材はC₃植物あるいは草食動物と考えられた。なお、隣接する北黄金貝塚の人骨は海産物への依存度が高かったと推定されている（南川, 2001）。

- ・浜中2遺跡（北海道礼文町）

宮田桂樹（2008）により縄文時代後期の土器内面付着炭化物について、ステロール分析、 $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ 、C/N測定などが行われ、土器内面付着炭化物についてはほぼ100%海産物と考えられている。

（引用・参考文献）

藤根久・山形秀樹（2011）土器内面付着黒色炭化物の安定同位体分析、豊田市郷土資料館編「寺部遺跡」：268-272、豊田市教育委員会。

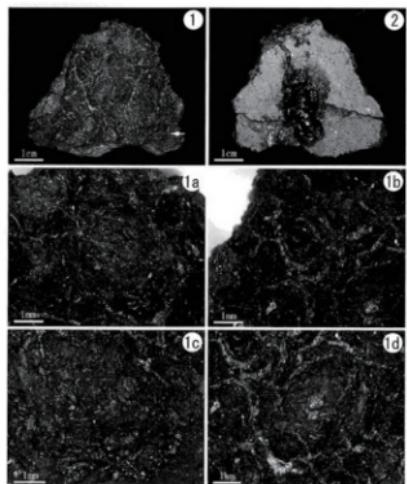
小林謙一（2008）縄文時代の獣年代 小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和詞・矢野健一編「縄文時代の考古学2歴史のものさし」：257-269、同成社。

小林謙一（2008）縄文土器の年代 小林謙一編「絶賛縄文土器」：896-903、アムプロモーション。

國本大・吉田邦夫・辻誠一郎（2009）押出遺跡のクッキー状炭化物、日本考古学会2009年度山形大会研究発表資料集、241-249。

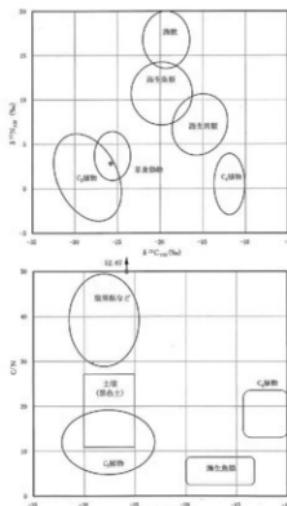
國本大・吉田邦夫・辻誠一郎・福田正宏（2010）押出遺跡のクッキー状炭化物と大木式土器の年代 東北芸術工科大学東北文化研究センター。

- 研究紀要, 9, 東北芸術工科大学東北文化研究センター.
- 國木田大・吉田邦夫 (2010) クッキー状炭化物の由来解明とその年代. 日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集, 150-151.
- 工藤雄一郎・小林謙一・坂本稔・松崎浩之 (2007) 下毛郡道跡における「C年代研究」縄文時代後期から晩期の土器付着炭化物と漆を例として. 考古学研究, 53(4), 51-71.
- 工藤雄一郎・小林謙一・山本直人・吉田淳・中村俊夫 (2008) 石川県御勝郡御勝町から出土した縄文時代後期・晩期土器の年代学的研究. 第四紀研究, 47, 409-423.
- 工藤雄一郎・山本直人 (2009) 大阪府松原市三宅西遺跡から出土した縄文時代後期土器付着炭化物の「C年代」測定. 大阪府文化財センター編「三宅西遺跡」; 464-469, 大阪府文化財センター.
- 工藤雄一郎・佐々木由香 (2010) 東京都東村山市下毛郡道跡から出土した縄文土器付着植物遺体の分析. 国立歴史民俗博物館研究報告, 158, 1-26.
- 工藤雄一郎 (2012) 後水期の考古編年と「C年代」 旧石器・縄文時代の慶良文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—, 212-229, 神泉社.
- 南川雅男 (1993) アイソトープ食性解説法. 日本国第四紀学会編「第四紀資料分析法」; 404-414, 東京大学出版会.
- 南川雅男 (2001) 炭素・窒素同位体分析により復元した先史日本人の食生態. 国立歴史民俗博物館研究報告, 86, 333-348.
- 宮田桂樹 (2008) 土器付着炭化物による古食性の研究. p. 86.
- 中井耕作 (2007) クッキー状・パン状食器. 小糸康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和利・矢野健一編「縄文時代の考古学5なりえ」; 253-259, 同成社.
- パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ (2011) 放射性炭素年代測定 (確実・土器). 豊田市郷土資料館編「寺部遺跡」; 239-242, 豊田市教育委員会.
- 坂本稔 (2007) 安定期同位体に基づく土器付着物の分析. 国立歴史民俗博物館研究報告, 137, 305-315.
- 間根眞二 (2008) 鎌戸式土器・小林道雄編「絶賛縄文土器」; 282-289, アムプロモーション.
- 鈴木康二 (2008) 北白川下層式土器・小林道雄編「絶賛縄文土器」; 312-319, アムプロモーション.
- 山形秀樹 (2003) 炭化物のC14測定. 峰一合遺跡, 73, 下呂町教育委員会.
- 山形秀樹・中村賢太郎 (2011) 人骨および土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体比と炭素同位比. 青野友哉・三谷義乃編「北黄金2遺跡発掘調査概要報告書」; 36-39, 伊達村営文化研究会.
- Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002). Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochihara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44(2), 549-557.
- 吉田英敏 (2003) 峰一合遺跡. p. 115, 下呂町教育委員会.
- 吉田邦夫 (2004) 火炎土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定. 新潟県立歴史博物館編「火炎土器の研究」; 241-249.
- 吉田邦夫 (2006) 炭化物の安定同位体分析. 新潟県立歴史博物館研究紀要, 7, 65-68.
- 吉田邦夫・宮崎ゆみ子 (2007) 煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究. 日本における稻作実前の主食植物の研究. 85-95.
- 吉田邦夫・西田泰民 (2009) 考古科学が探る火炎土器. 新潟県立歴史博物館編「火炎土器の国 新潟」; 87-99, 新潟日報事業社.
- 吉田邦夫編 (2012) アルケオメトリーー考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見るー. p. 287, 東京大学総合研究博物館.

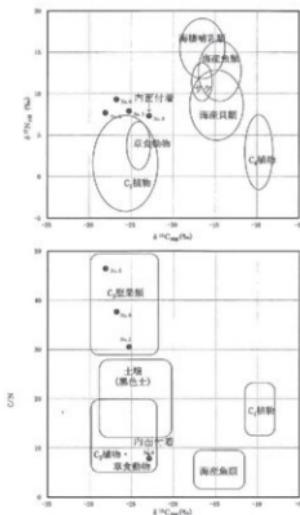


1. 土器内面 2. 土器外面 1a. 材質劣化物粒度1
1b. 付着炭化物粒度2 1c. 付着炭化物粒度3 1d. 付着炭化物粒度4

愛知県豊田市守部遺跡の土器内面付着炭化物（藤根・川形, 2011より転載）



1. 土器内面付着炭化物 (Tondoh et al. 2003) [に基づいて作成]
2. 土器外表面付着炭化物 (山形・中村 2007) [に基づいて作成]



北海道伊達市北黄金2遺跡の土器内面付着炭化物 (山形・中村, 2011より転載)

東海地方における峰一合遺跡

長田 友也 (南山大学非常勤講師)

はじめに

東海地方の縄文時代前期後半は、土器にみられるように早期東海系条痕文土器以来の土器伝統が薄らぎ、関西地方と同義の枠組みの中でとらえられることが多い。前期後半の土器型式である鉢ノ木II式には、関西地方の北白川下層II a・II b式に特徴的な貼布隆帶文・側線のある爪形文、赤彩などが盛行し、設定当初より「東海地方西部の鉢ノ木II式以後は北白川下層式名称を用いて処理されるべき可能性が高い」との指摘もなされてきた（増子 1977）。しかし、後続する北白川下層II c・III期になると、再び東海地方の独自性がみられるようになり、大麦田式や芦戸式とされる凸縄文土器が盛行していく（増子 1985）。こうした土器の展開がみられる背景には、東海地方において何らかの文化的な変化が生じたことが予想される。

下呂市峰一合遺跡は、まさにこの東海地方での文化変化がみられる時期に當まれた遺跡であり、峰一合遺跡の代名詞でもある“下呂石”を用いた石器製作も、こうした文化変化をもたらした要因である可能性も大きいに考えられる。

そこで本稿では、前期後半の東海地方の特徴を確認するために、縄文土器以外の遺構・遺物といった文化事象について概観し、その上で峰一合遺跡の重要性について考えてみたい。

1. 縄文時代前期後半・東海地方の遺構

縄文時代前期後半は、下呂市の場遺跡や岐阜市御望遺跡に代表されるように、複数の竪穴住居跡を伴う小規模な集落遺跡がみられるようになり、遺跡数自体も増加傾向にある（図1、増子 2001）。これら集落遺跡を構成する遺構としては、住居跡と埋葬施設があげられる。

住居跡は縄文時代に一般的な竪穴住居跡を基本とし、その平面形態は方形・隅丸方形プランのものと、円形・楕円形プランのものとがみられ、的場遺跡をはじめこれらが同一の遺跡内で混在する状況がみられる（図2）。この住居跡の平面形態は、方形・隅丸方形のものが関東地方・信州地方の諸磯式に、円形・楕円形のものは関西地方の北白川下層式にそれぞれ特有の住居形態であり、こうした東西地域の影響を示していると考えられる。したがって、遺跡内で住居平面形態が混在する状況は、住居に関する情報について東西の情報が入り混じった状態を示

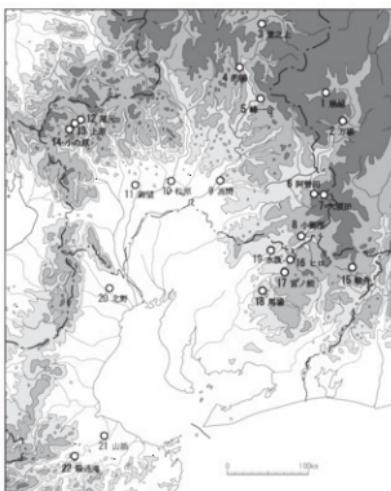


図1 東海地方・前期後半期の住居跡出土遺跡

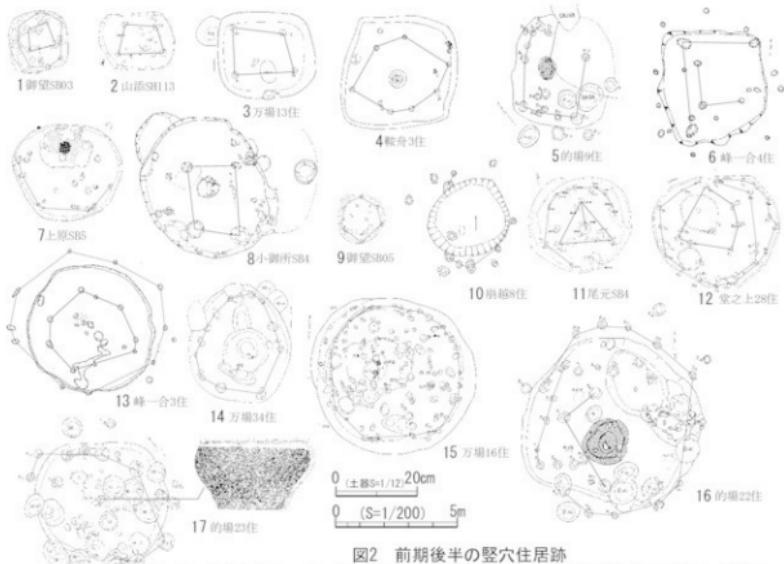


図2 前期後半の竪穴住居跡

(1~8: 方形プラン、9~17: 円形・楕円形プラン、各報告書より加除筆の上転載)

しているといえよう。

こうした東西地域の影響は周縁部においてより顕著であり、東海地方に隣接する長野県木曾谷にある木曾郡大桑村万場遺跡では、方形・隅丸方形のものが11軒中4軒と半数近くを占め、東海地方の西端にある揖斐川町の徳山ダム周連遺跡群を形成する尾元遺跡・上原遺跡・小の原遺跡では6軒すべて円形・楕円形プランであるというように、遺跡の地理的位置によって東西の影響の濃淡がうかがえる。さらに住居跡内のが跡についてはより顕著であり、諸磯式に伴ってみられる土器を埋設した埋葬炉が、長野県木曾群大滝村崩越遺跡3号住居跡、的場遺跡23号住居跡、中津川市阿曾田2号住居跡、同久須田15号住居跡など東海地方東部地域の遺跡で出土しており、東海地方東部地域と諸磯式との関係性を示している。その一方で、東海地方南西部にあたる三重県南部ではやや異なる状況を示している。三重県松阪市山添遺跡では、3軒の住居跡すべてが隅丸方形プランであり(図2-2)、諸磯系の住居形態を示しているとともに、諸磯b式中段階の土器群が一定量出土しており、東日本地域との交流が伺える。したがって、東西地域の影響は単純な地理的な要因だけではなく、海浜部を介した交流など、各地域で文化受容の様相が異なっていた可能性も考えられる。

住居跡以外の遺構では、埋葬施設があげられる。前期後半の埋葬施設は、御望遺跡に代表的なように土坑墓が一般的であり、さらに土坑墓内に底部を上面にしたいわゆる“甕被り葬”と考えられる状態のものや、抱き石状に石皿や甕を伴うものがみられる。こうした埋葬方法は、諸磯式・北白川式のいづれにおいてもみられる。土坑墓以外の埋葬施設として注目されるのが、中津川市落合五郎遺跡、恵那市小御所遺跡、愛知県豊田市水汲遺跡でみられる、深鉢を土坑内に埋設した土器埋設構造である(図3)。土器埋納構造自体は、内部から埋葬人骨や副葬品がみられないため、埋葬施設であるのか、貯蔵容器など別の用途のものであるか



図3 前期後半の埋設土器（各報告書より加除筆の上転載）

の判断が難しい。こうした土器埋設構造は、関東地方において前期中葉黒浜式以後にみられ、そうした影響の下で生じたものとも考えられるが、現状では詳細な検討はなされていない。埋葬施設では、他地域との影響が見え隠れするものの、東海地方全体では特徴的な墓制は土坑墓を主体とするといった程度しかみられず、東海地方の独自性を認めることは難しい。

2. 縄文時代前期後半・東海地方の遺物

縄文時代前期後半の土器以外の遺物としては、石器・石製品があげられよう。石器では、石鏃・石匙・石錐・打製石斧・礫石錐・磨製石斧・磨石・敲石・石皿・磨製石斧といったいわゆる定形的な石器器種が前期後半以降に定着する。これら石器の組成では、御望遺跡での礫石錐の多出や、岐阜県中津川市落合五郎遺跡での石鏃・石匙の多出など、一部の遺跡によって出土する石器種に偏りがみられる。しかしこうした石器組成の偏りは、東海地方内での小地域や河川流域単位でみられる現象ではなく、あくまで個々の遺跡の立地環境との関係から生じるものである。御望遺跡では遺跡近くを小河川が流れ水面漁撈が可能な環境にあり、落合五郎遺跡では小河川を望む丘陵地に遺跡が立地することから狩猟が盛んになる要素があるとともに、石鏃・石匙の素材となるチャートをはじめとする剥片石器製作に適した石材入手が容易であったことが、石鏃・石匙の多出傾向につながったものと考えられる。したがって、石器器種およびその組成においては、東海地方全体での特徴的な方を指摘することは難しい。特徴として強いてあげれば、福井県鳥浜貝塚などで多くみられる北白川下層式土器に特徴的な正三角形を呈する“鳥浜型石匙”（大工原 2008）が各地で散見され、

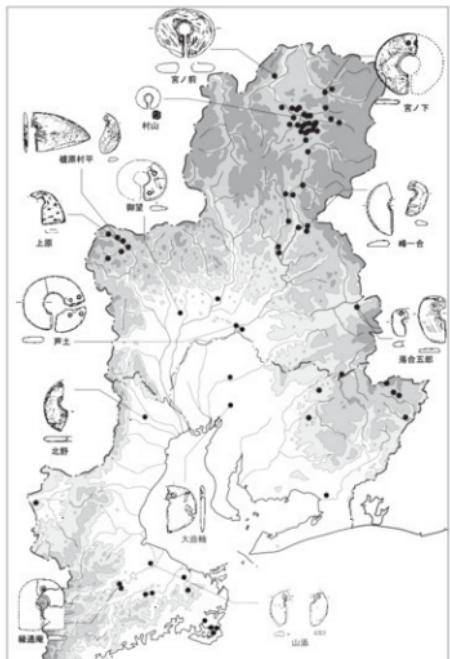


図4 前期後半の块状耳飾耳飾の分布
(大石・三島2010、伊藤2010、田村2010を元に作成)

ている。このことは块状耳飾の展開が岐阜県をはじめとする北側からの流入ではなく、先の住居形態同様に沿岸部ルートによって展開したことを示していよう。

前期後半を代表する遺構・遺物などの文化事象を概観したが、前期後半に盛行する縄文土器ほどには、東海地方の独自性を示すような文化事象は見当たらず、むしろ諸磯式・北白川下層式に代表される東西両地域の様々な情報が入り組んだ様相を示しているといえよう。ただし、前段階と比較すると、圧倒的に諸磯式土器に代表される関東地方の文化事象が東海地方に入り込んでおり、これにより東西の情報が混在した状況が作り出されているといえよう。

したがって縄文時代前期後半は、北白川下層式土器に代表される関西地方の周縁地域として位置づけられてきた東海地方に、関東地方の諸磯式土器をはじめとする文化事象が流入し、関西地方の影響下から東西の文化事象が混在する地域へと、徐々に変質していく時期として評価することができよう。そうした意味では、東海地方特有の文化形成を促していくような、萌芽期であったとみることもできよう。

3. 石器石材からみた峰一合遺跡と下呂石

以上のように、峰一合遺跡が盛行期を迎える縄文時代前期後半は、大麦田式・芦戸式といった特徴的な縄

前期後半を代表する石器として注目される。しかし、石器名称にもなっているように、あくまでも鳥浜貝塚をはじめとする北白川下層式に伴って展開する石器器種であり、東海地方の独自性を示すものではない。

非実用品である石製品としては、装身具として块状耳飾があげられよう。块状耳飾は調文時代前期文化を代表する石製品であり、峰一合遺跡をはじめ、東海地方において多くの遺跡で出土しており、既存の集成により97遺跡214点の块状耳飾が知られている(大石・三島2010、伊藤2010、田村2010)。その分布をみると、岐阜県が70遺跡170点と最も多く出土しており、特に高山盆地を中心とする飛騨地方に集中する傾向にあり(吉朝1985)、前期後半に块状耳飾が盛行した北陸地方の影響を示す結果といえよう。これに対し、愛知県・三重県といった東海地方南部では块状耳飾の出土は低調であり、愛知県では岐阜県に近い三河山間部において出土しており、岐阜県域との関係での展開が予想される。三重県においても北部のいなべ市北野遺跡で1点块状耳飾が出土しているが、その分布の中心は中南部の伊勢平野～志摩半島に集中している。

表1 前期後半東海地方・各遺跡における剥片石器利用石材（スクレイバーにはR.F.・U.F.を含む）

	石器										石器									
	石器名	下呂石	その他 石器	貝殻	玉類	チャート	その他 石器	小石	石器名	下呂石	その他 石器	貝殻	玉類	チャート	その他 石器	小石				
峰一合遺跡	14 2%	95.8%	4 0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	11.0%	3 2%	0.0%	9 0.8%	1 0.1%	12 0.9%	200 16.0%	2 0.2%	30.4%	0.0%	43.0%	
落合五郎遺跡(1次)	25 33.3%	66.7%	0 0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25 33.3%	1 1.3%	0.0%	1.0%	0.0%	0.0%	25 33.3%	2 2.6%	30.0%	0.0%	39.0%	
落合五郎遺跡(2次)	25 33.3%	66.7%	0 0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25 33.3%	1 1.3%	0.0%	1.0%	0.0%	0.0%	25 33.3%	2 2.6%	30.0%	0.0%	39.0%	
小御所遺跡	36 39.0%	60.0%	0 0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	36 39.0%	0 0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	36 39.0%	2 2.1%	31.1%	0.0%	39.0%	
芦戸遺跡	2 6.7%	93.3%	0 0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2 6.7%	4 40.0%	0.0%	1 10.0%	0.0%	0.0%	2 6.7%	1 10.0%	33.3%	0.0%	33.3%	
御誕遺跡	9 45.0%	55.0%	1 5.5%	1 5.5%	1 5.5%	1 5.5%	1 5.5%	1 5.5%	23 100.0%	1 4.3%	0.0%	8 34.8%	1 4.3%	1 4.3%	23 100.0%	1 4.3%	33.3%	1 4.3%	33.3%	
水汲遺跡	4 10.0%	90.0%	1 2.5%	1 2.5%	1 2.5%	1 2.5%	1 2.5%	1 2.5%	4 100.0%	0 0.0%	0.0%	1 25.0%	0 0.0%	0.0%	4 100.0%	0 0.0%	25.0%	0 0.0%	75.0%	

文土器が盛行する一方で、他の文化事象では未だ周辺地域の影響がみられ、東海地域の独自性はみられない、あるいは萌芽期であると考えられる。このような時期に峰一合遺跡は営まれるが、その内容は5軒もの堅穴住居跡や大量の土器・石器に代表されるように、前期後半において比較的大規模な集落遺跡に含まれる。その背景には、峰一合遺跡の特徴である“下呂石”を用いた石器製作・石材の利用が予想され、これまでにも前期後半段階から湯ヶ峰を中心とする地域での下呂石利用が指摘されてきた（田部2003など）。そこで、前期後半における東海地方の各遺跡での石器石材利用のあり方、特に下呂石に関連する石器器種である、石鑓・石匙・スクレイバー類の石器石材利用を検討してみた（表1）。一般に前期後半の剥片石器は、旧石器時代以来のチャート利用が継続しており、これに下呂石や信州産黒曜石が加わるとされている（田部前掲）。

はじめに、峰一合遺跡では石鑓・石匙・スクレイバーのいずれにおいても、下呂石が9割近く用いられており、まさに下呂石原産地ならではの状況を示している。峰一合遺跡に次いで、下呂石の利用が高いのが中津川市落合五郎遺跡である。落合五郎遺跡へは、湯ヶ峰から国道257号線を南下し舞台峠から旧加子母村を越え、付知川から木曽川本流へと至る経路が考えられ、こうした経路により下呂石が運ばれたものと考えられる。下呂石が点礫として南下する飛騨川下流域ではなく、陸路を越えて到達する落合五郎遺跡において下呂石が多用される点は注目されよう。しかし、この落合五郎遺跡では、石鑓では約半数近くに下呂石が用いられるが、スクレイバー類では1/3程度と辛うじて主体的な石材として位置づけられるにとどまり、石匙に至っては2割程度と、5割以上を占めるチャートの約半数に留まる石材利用であり、必ずしも下呂石が主体的な石材として利用されていたとは認めがたい状況にある。

こうした下呂石利用が低調な傾向は、岐阜県美濃地域の坂祝町芦戸遺跡・岐阜市御望遺跡、愛知県境の恵那市（旧上矢作町）小御所遺跡、愛知県北東部の豊田市水汲遺跡といった周辺地域ではより一層顕著であり、石鑓・石匙・スクレイバーの各石器器種において主体となる石材はチャートが占めており、東海地方に通有のチャートを用いた剥片石器製作を示している。

したがって、峰一合遺跡が盛行する縄文時代前期後半には、落合五郎遺跡に代表されるように湯ヶ峰周辺地域では、一定量の下呂石利用が認められるものの、縄文時代後期以降の爆発的な下呂石利用の増加に比べればその利用は小規模であり、まさに下呂石利用が徐々に始まった萌芽期であるとの位置づけができる。

4. 峰一合遺跡からみた東海地方

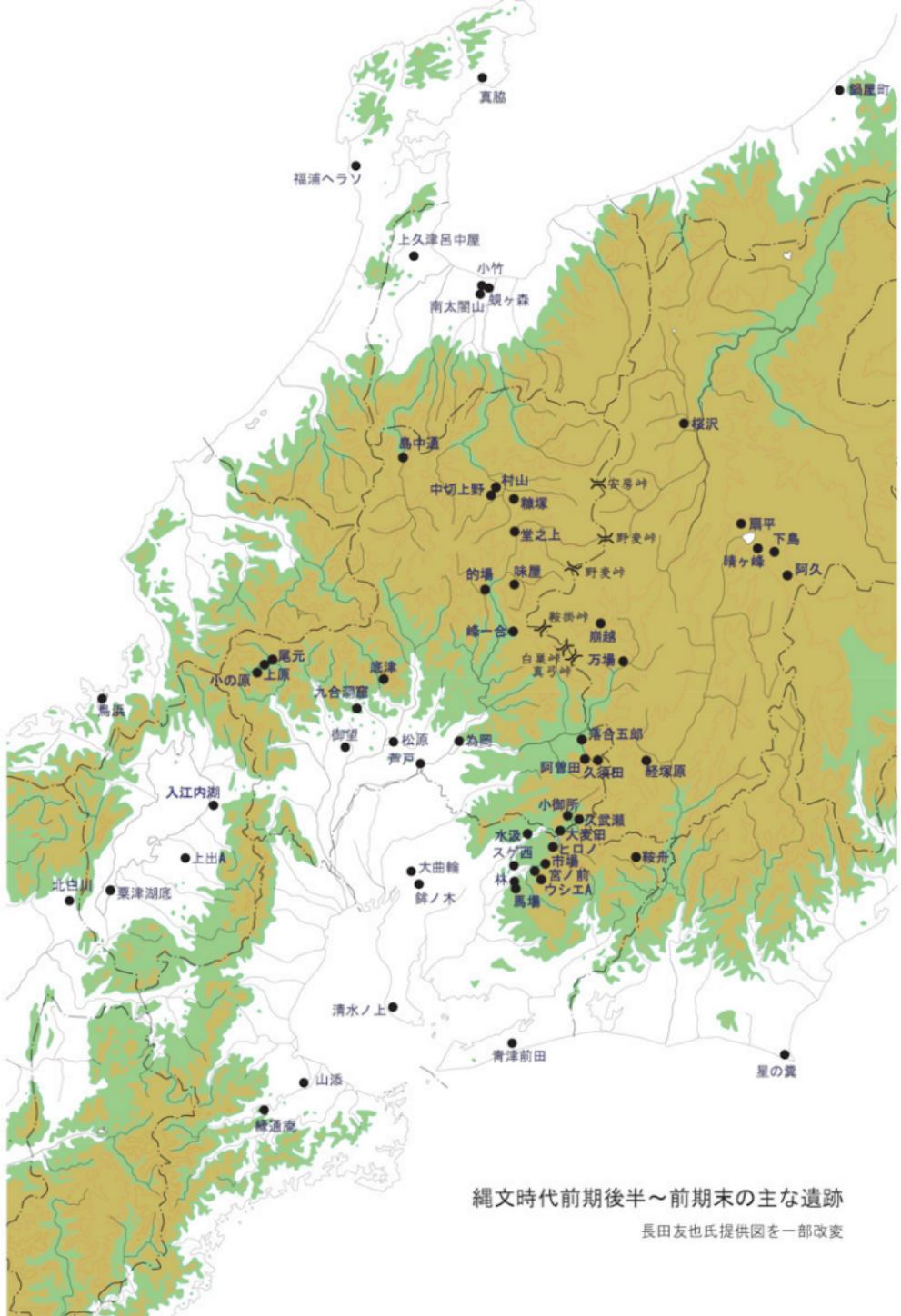
峰一合遺跡が営まれた前期後半は、それまで薄らいでいた東海地方という地域性が再び顕在化する時期であり、凸帯縄文土器群にみられる特徴が出現する一方で、他の文化事象は隣接する東西の文化の影響を色濃く受けしており、未だ東海地域の独自性はみられない。峰一合遺跡の代名詞でもある下呂石についても、その利用は原産地およびその周辺地域に限定され、その後の東海地方を代表する剥片石器石材としての様相は未だ確立していない状況にある。

しかしこれ以後の時期に、東海地方全域に下呂石が展開することを考慮すると、原産地だけでなくその周辺地域にまで下呂石利用が広がっていった前期後半は、下呂石の歴史において重要な時期であり、その中核となったのは峰一合遺跡であったと考えられる。峰一合遺跡の出現により、それまでチャート一辺倒であった東海地方の剥片石器石材に、新たに下呂石という選択肢が加わり、関西地方のサヌカイトや関東・中部地方の黒曜石といった、他地域を代表する剥片石器石材に負けない素材を獲得し、利用し始めることができたともいえよう。すなわち、峰一合遺跡の歴史は、そのまま下呂石利用の歴史の端緒を示しており、今後も注目すべき遺跡・資料群なのである。

(引用・参考文献)

- 伊藤正人 2010 「愛知県の块状耳飾」『玉文化』第7号 157-159頁 日本玉文化研究会
- 宇野治幸ほか 1991 「小の原遺跡・戸入岸子春遺跡」徳山ダム水没地埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 岐阜県教育委員会
- 内藤信雄ほか 1995 「御望遺跡」岐阜市教育委員会
- 大石崇史・三島 誠 「岐阜県の块状耳飾」『玉文化』第7号 164-173頁 日本玉文化研究会
- 大江まさるほか 1993 「的場遺跡」岐阜県恵那町教育委員会
- 長田友也編 2011 『水没遺跡 第2・3・5・6次調査』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第49集 豊田市教育委員会
- 小野木学ほか 2000 『上原遺跡 II』岐阜県文化財保護センター調査報告書第54集 岐阜県文化財保護センター
- 春日井恒 2003 『尾元遺跡』岐阜県教育文化財埋蔵文化財保護センター調査報告書第82集 岐阜県文化財保護センター
- 藤山誠一 1994 『北野遺跡第2次発掘調査報告』員弁町埋蔵文化財調査報告書3 三重県員弁町教育委員会
- 神村透編 1982 『南城』王滝村の文化財 No.2 長野県木曾郡王滝村教育委員会
- 河村一彦ほか 1998 「上原遺跡 I 徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集」岐阜県文化財保護センター調査報告書第36集 岐阜県文化財保護センター
- 河野典夫ほか 1991 『久須田遺跡発掘調査報告書』中津川市教育委員会
- 小浜洋ほか 2007 「山添遺跡(第4次)発掘調査報告」三重県埋蔵文化財調査報告 280 三重県埋蔵文化財センター
- 大工原 豊 2008 『绳文石器研究序論』六一書房
- 田部附士 2003 「绳文時代前期・中期の石材利用」『第5回関西绳文文化研究会 绳文時代の石器II -関西の绳文前期・中期』 101-106頁 関西绳文文化研究会
- 田村陽一 2010 「三重県の块状耳飾」『玉文化』第7号 160-163頁 日本玉文化研究会
- 増子康眞 1977 「解説(8) 綱文化の前期概要」『東海先史文化の諸段階(資料編I)』177頁
- 増子康眞 1985 「北白川下層II a式・III式併行の東海地方西部の土器」『古代人』45 1-11頁 名古屋考古学会
- 増子康眞 1998 「第4部 小御所遺跡」『上村川下流域の考古学的調査』上矢作町内遺跡発掘調査報告書 73-148頁 岐阜県上矢作町教育委員会
- 増子康眞 2001 「愛知県における绳文時代集落の諸様相」『列島における绳文時代集落の諸様相』第1回研究集会 基礎資料 451-468頁 綱文時代文化研究会
- 松葉和也 1999 『縁通庵遺跡・アカリ遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財報告 171 三重県埋蔵文化財センター
- 百瀬忠幸ほか 2001 「万場遺跡」『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書 383-391頁 長野県大桑村教育委員会
- 吉朝富留 1985 「飛驒の考古遺物集成 I」高山市教育委員会
- 吉田英敏 2003 「峰一合遺跡」岐阜県下呂町教育委員会
- 渡辺誠編 1985 『阿曾田遺跡発掘調査報告書』中津川市教育委員会

卷末資料集



縄文時代前期後半～前期末の主な遺跡

長田友也氏提供図を一部改変

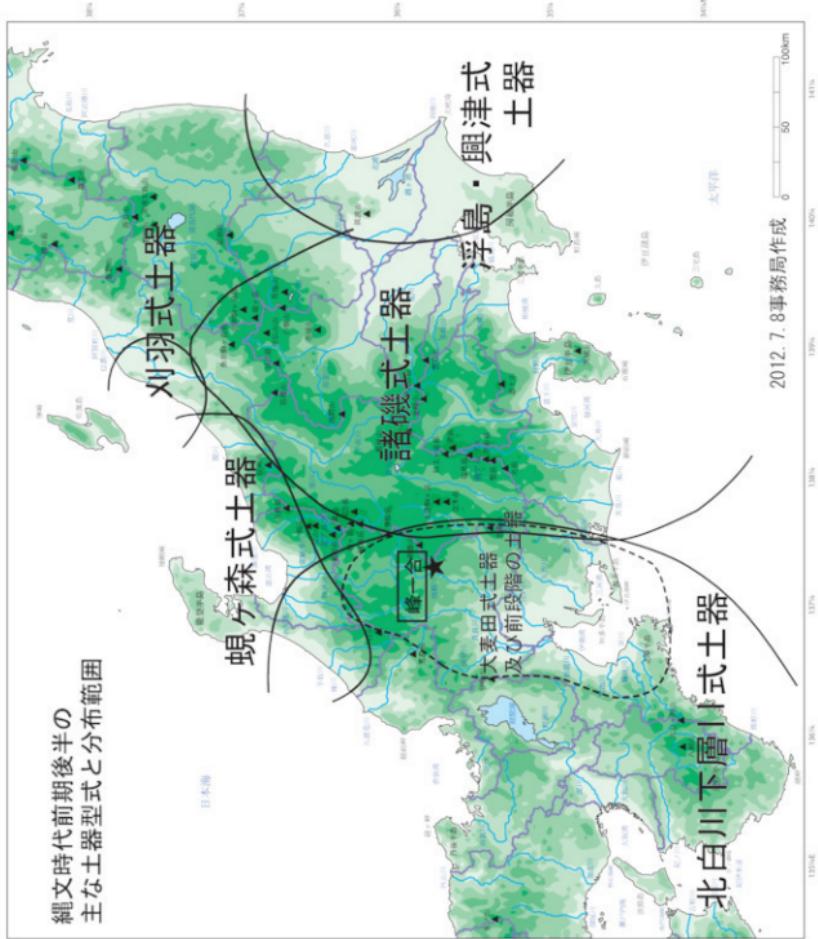
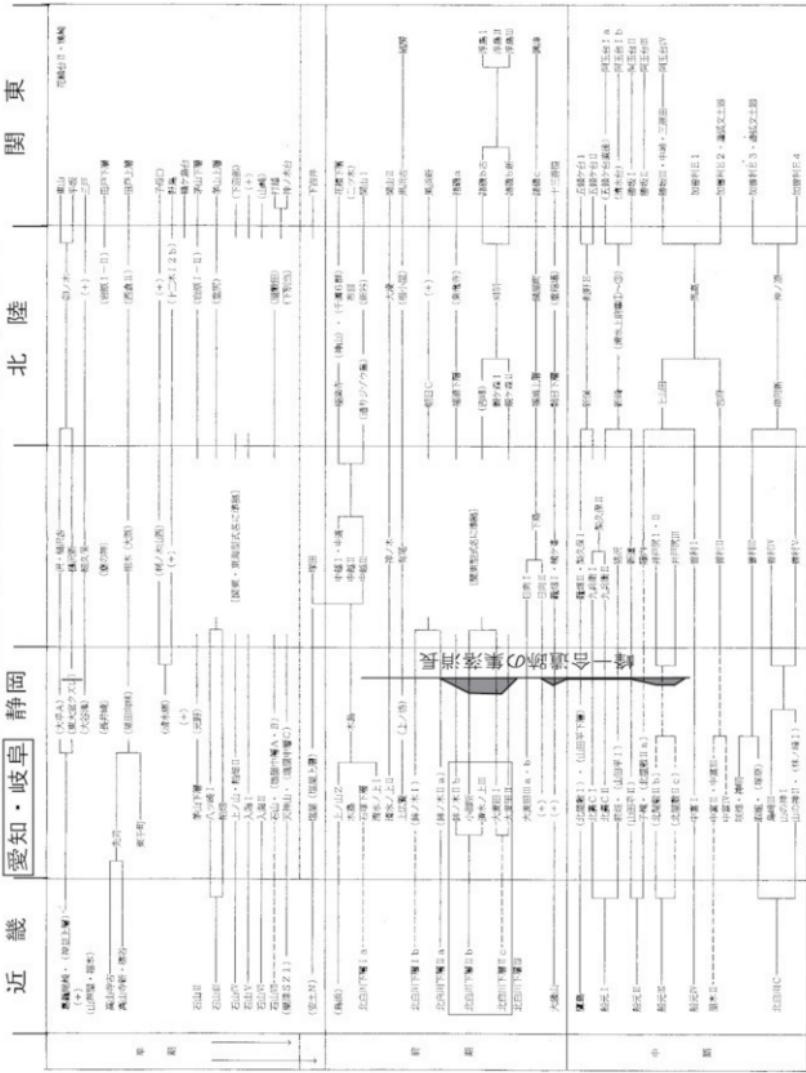


表1 純文士器伝承年表抜粋（純文時代文化研究会1999『純文時代10』より）



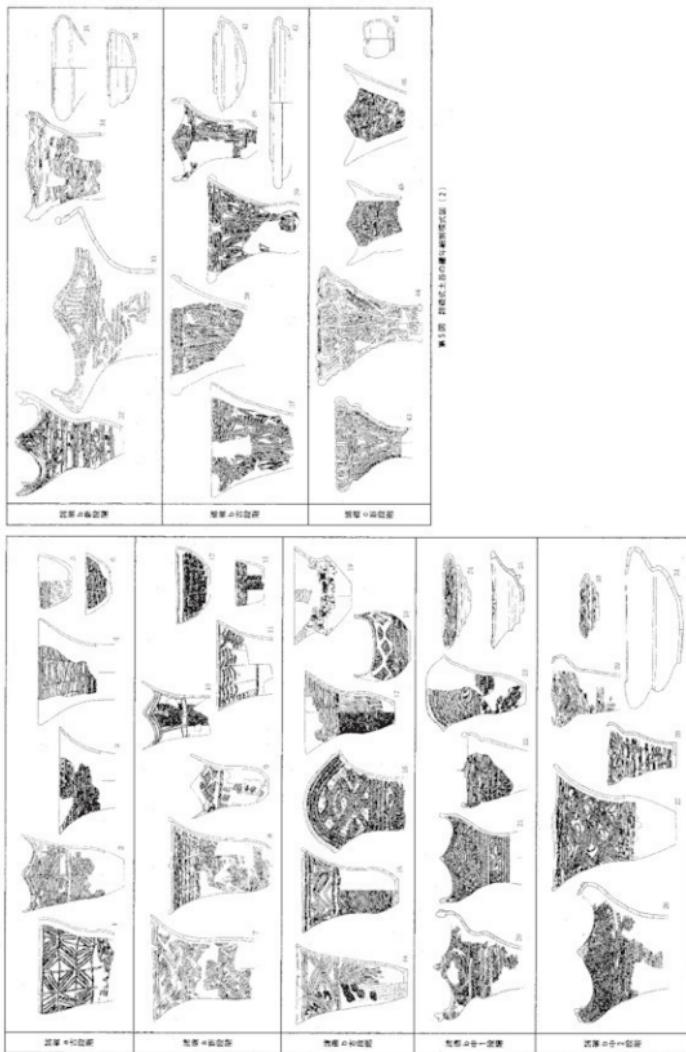
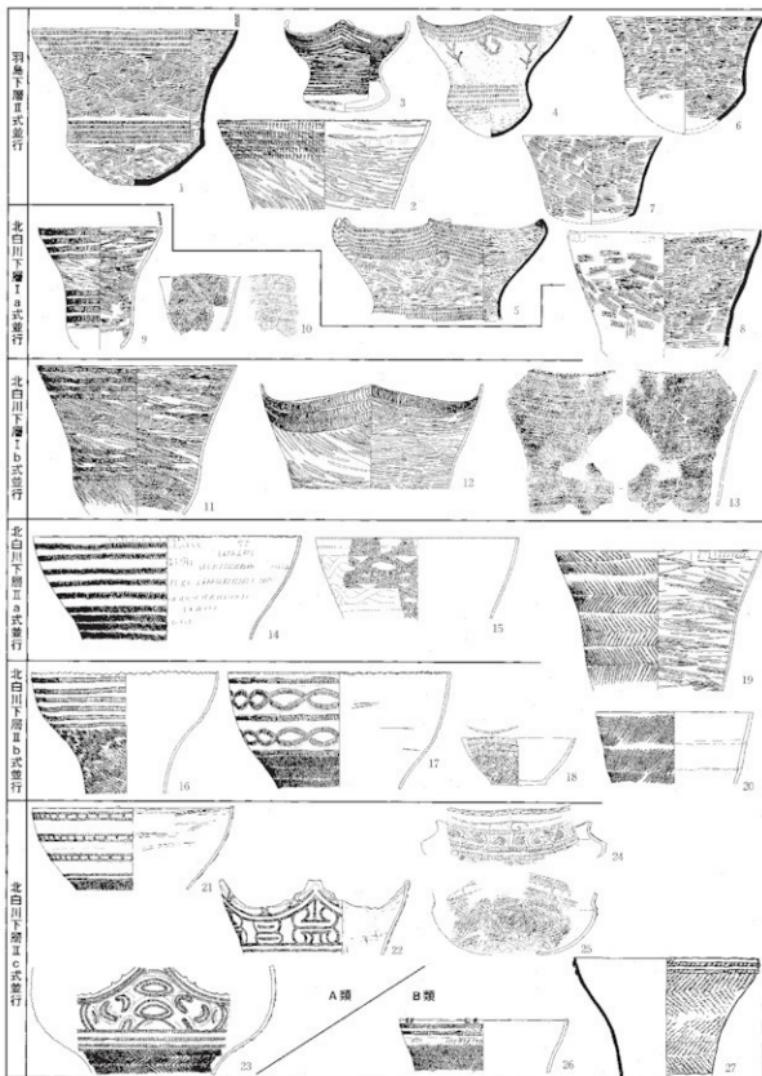


図1 諸様式土器編年表（『簡報2008「縄文土器」』より）

■12 縄文式土器の編年表(1)

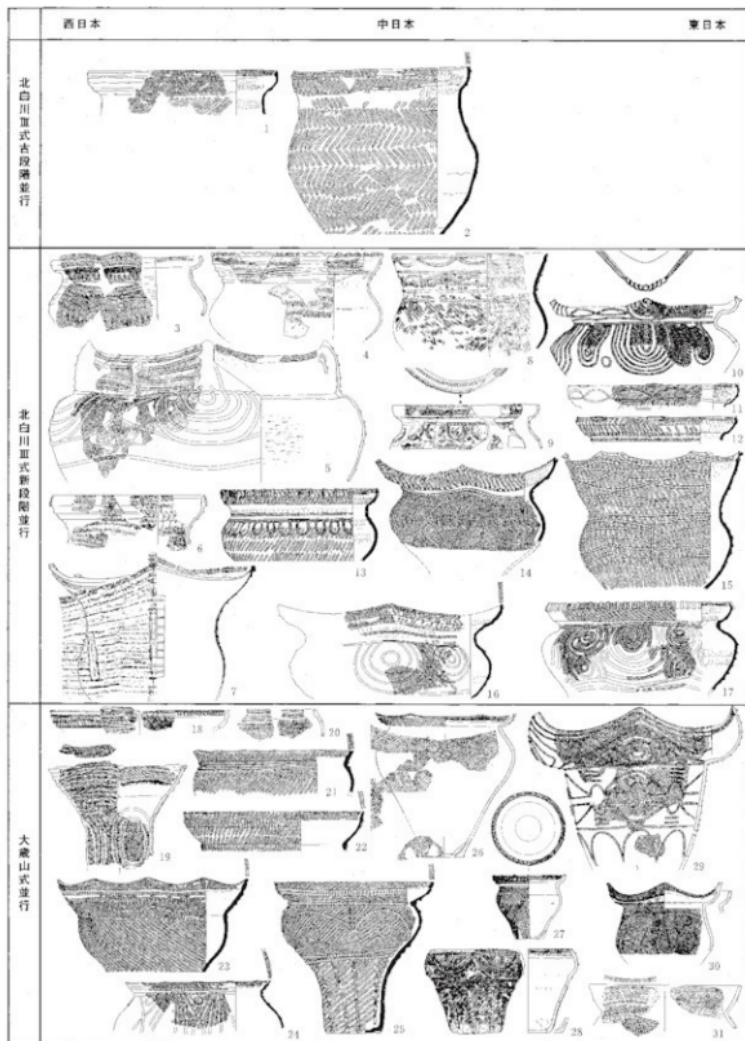
1-9 10-15 佐原山(鹿児島) 2-1985(348) 3-4-6-7-22 岩手(1件) 1-10(1件) 7-8-12-13-14-15-16-17-18-19-20-21-22-23-24-25-26-27-28-29-30(1件) 1-11(1件) 1-12(1件) 1-13(1件) 1-14(1件) 1-15(1件) 1-16(1件) 1-17(1件) 1-18(1件) 1-19(1件) 1-20(1件) 1-21(1件) 1-22(1件) 1-23(1件) 1-24(1件) 1-25(1件) 1-26(1件) 1-27(1件) 1-28(1件) 1-29(1件) 1-30(1件) 1-31(1件)



第2図 北白川下層I式・II式土器の横年縦別様式図

1・4～8：志高（京都市） 2・3・9・11・12・14・16・17・19～23・26：島浜（福井） 10・13・21：入江内瀬（滋賀） 15・27：国府（大阪）
18・25：栗津瀬底（滋賀） （縮尺：1/8）

図2 北白川下層I式・II式土器編年表（鈴木2008『総覧縄文土器』より）



第7図 特殊凸面文系土器の編年細別模式図

1・2・11～17・21～25：志高（京都） 3・19：篠原（鳥取） 4～6：谷崎（岡山） 7：星木（岡山） 8：尾元（岐阜） 9：上原（岐阜）
10：大河（滋賀） 18：飯豊町（高知） 20：上南A（滋賀） 26：池田B（静岡） 27：千瀬須社（長野） 28：桂野（山梨） 29：桜並（神奈川）
30：三沢田（東京） 31：宮檍（東京） (縮尺：1/8)

図3 北白川(下層)Ⅲ式・大歳山式土器編年表(鈴木2008『総覧縄文土器』より)

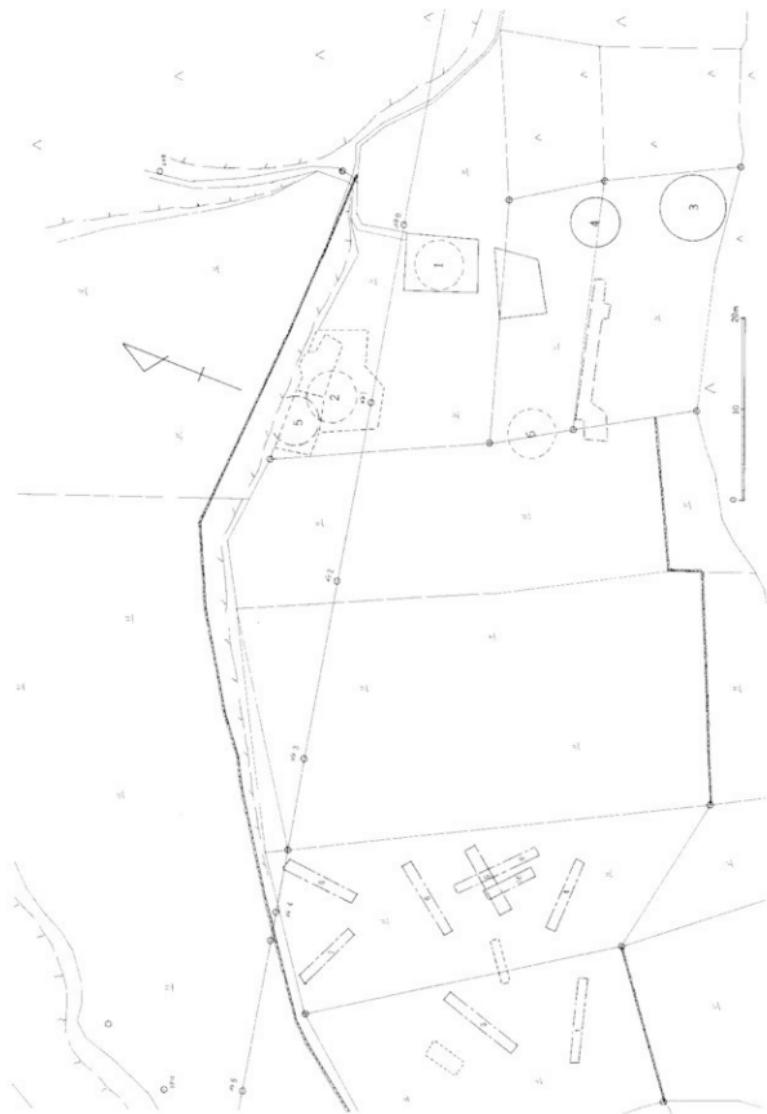


図4 峰一合遺跡遺構分布図（吉田2003『峰一合遺跡』より）

下呂ふるさと歴史記念館開館 40 周年記念事業シンポジウム
縄文・峰一合遺跡の時代の再検討

発行日 2012(平成 24) 年 7 月 8 日

編集・発行 下呂市教育委員会

下呂ふるさと歴史記念館

印刷

